

バイリンガル児童の第3言語習得と
2つの母語の喪失

—— ナラティブデータ分析を中心に ——

金 菊 熙
(松山大学人文学部 准教授)

松 山 大 学
言語文化研究 第38巻第1-2号 (抜刷)
2018年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 38 No. 1-2 September 2018

バイリンガル児童の第3言語習得と 2つの母語の喪失

—— ナラティブデータ分析を中心に ——

金 菊 熙

要 約

This case study investigates the attrition of two mother tongues, Korean and Japanese, in a bilingual child who learned English as a third language. The subject had maintained the two primary languages since the age of eighteen months until moving to the United States at nine years and five months. She stayed in the U.S. for almost thirteen months. Speech data in Korean and Japanese were collected for narrative analysis. The subject described the content of a silent film, *The Lion's Cage*, over the first fifty days from her arrival in the U.S. to three days before her departure, with a one month interval. Observational notes were taken to monitor the subject's daily language use and its change. Data analysis revealed three main findings. First, clear symptoms of attrition in Korean and Japanese speech data were detected three months into the subject's stay in the U.S., whereas her English progressed rapidly and faster than generally expected for the first three-month period. Second, as opportunities to use her mother tongues decreased, errors in speech production gradually appeared in the form of language transfer, or cross-linguistic influence, between Korean and Japanese. On this finding, further research on the role or the relationship between dominant and nondominant languages in a bilingual child is needed to better understand bilingual language preference and language use frequency. Third, vocabulary and pronunciation deficiencies were the most readily detected features of language attrition, while some observed grammatical errors became permanent with time. What seems doubtful is if any grammar knowledge of Korean and Japanese could be retrieved without further input from or contact with the two mother tongues.

キーワード：バイリンガリズム，第3言語習得，母語喪失，ナラティブ

1. はじめに

幼児期の生活環境の変化等によって主要言語が母語から第2言語に変わる際、第2言語が自然に習得されていくにつれ、まだ発達途上にある母語の能力が一定の期間あるいは継続的に停滞または減退していくことがある¹⁾。「バイリンガルになること」は、一部の誤解と誇張を除けば、グローバル時代の現在では、避けて通れないことであり、どの言語や文化に属する社会構成員にも強く求められる資質の1つである。そしてこのような資質を満たすことが「メリット」と思われていた時代から「当たり前」のように認識される時代が変わりつつある。それでも、自然に習得に至ったと思われる母語²⁾と、一定の母語の能力が備わってから年齢も生活環境も個々人で異なる条件下で学習や体得などで進む2番目、3番目の言語では、複数の面で異なる様相を示すことがある³⁾。

母語話者の言語能力⁴⁾を語るとなると、自然にモノリンガルの言語能力を考えがちであるが、モノリンガルといっても個々の母語話者の持つ言語能力は、少なくとも「聞く」「話す」「読む」「書く」といった運用の面では、千差万別である。言語形成期⁵⁾の途中でありながら思春期前に社会の主流言語が母語から他の言語に変わった環境で暮らすようになった子どもの場合、「言語能力」は

-
- 1) ここで著者が意図しているのは、バイリンガルの複数の言語能力を当該言語のそれぞれのモノリンガルの言語能力に等しいものと考えがちな世間の「誤解」を予め遮断したいことであって、バイリンガルの負の側面を強調するためのものでないことを断っておきたい。
 - 2) 本稿では、習得された順序に従って話者の第1言語(L1)、第2言語(L2)、第3言語(L3)という表記する。また、便宜上「母語」を第1言語の代わりに用いることがある。しかし、モノリンガルとは違って、バイリンガルまたはマルチリンガルにおいて母語は必ずしも話者の優勢言語 (dominant language) とは限らないため、必要に応じて、「優勢言語」「非優勢言語」といった表現を用いることもある。
 - 3) 生まれた時から2つまたはそれ以上の言語使用環境で成長することで、自然に2つ以上の言語を母語とする例もある。しかし、その場合でも、複数の母語が全く同等の能力を成すことはなく、時と場合によって優勢言語-非優勢言語に分けることがある。
 - 4) 母語話者の言語能力を理解することは大変重要な課題であるが、本稿の狙いを超えるテーマでもあるためこれ以上の言及を控えたい。代わりに、このテーマに関するものとして、2003年に Multilingual Matters より出版された Alan Davies 著の『The Native Speaker: Myth and Reality』を参照されたい。

当然複数の言語の能力を指すことになり、言語ごとの能力を合わせたものがバイリンガル児童の言語能力になると考えられる。言い換えると、一概にバイリンガル児童といっても、複数の言語に接触し始めた年齢や、個別言語のインプットの量、使用頻度、接触期間、認知能力の発達程度、家庭内での使用言語、兄弟姉妹の有無のような家族構成、性格や適性、動機付けなどの幾つもの変数関わっているため、バイリンガルの言語能力を一般化して語ることは到底できない。

思春期以降の後期バイリンガルであれ、幼年期の早期バイリンガルであれ、複数の言語を日常の中で使いこなすだけの能力を保持していくにはそれなりの「負担」を日々強いられることになる⁵⁾。大人でも子どもでも個々人の持つ複数の言語能力の違いによる程度の差はあるが、複数の言語間で転移が起こることや、コードスイッチング・コストと呼ばれる現象が観察されることもその一例として挙げることができる。特に母語の形成期の段階にある子どもの場合、複数の言語が発達していく過程で一方の言語能力に衰えが生じる喪失の傾向が見られることもある。付言すると、言語喪失とは、新たな言語への接触に伴う当該言語の学習と発達の過程で、それまでに身につけていた1つ以上の言語の能力に、非病理的な理由で一定の衰えが反復的に観察される現象である。さらにその現象は、音声や語彙、文法、読解、聴解、構文などといったあらゆる言語の運用能力において、一部または複数のレベルにおいて観察される。喪失の傾向が現れる時期や程度、進行の過程にも個人差の要因は大きく関わってくるのがこれまでの多数の先行研究で分かっている。また先行研究の多くは事例研究となっていて、調査対象となる言語が母語であれば母語喪失、母語以外の場合

5) 中島(2010:22)を引用すると、言語の形成でもまた文化の形成においても、9~10歳ぐらいに分水嶺があることがこれまでのイメージ教育や日本の海外児童生徒教育で指摘されているので、9~10歳以前を言語形成期前半、それ以降を言語形成期後半とする。

6) 森島(2015:166~167)では、バイリンガルの負の側面について、個別言語の語彙数がモノリンガルに比べて少ないことや、舌端現象(tip-of-the tongue phenomenon)、音韻的妨害説(phonological blocking hypothesis)、マラプロビズム(malapropism)といった言い間違いの現象を挙げて詳述している。

は、L2 喪失や外国語喪失などと区分される。

本稿は、子どもの母語喪失に焦点を当て、喪失の傾向が認められる言語のレベルや各々の要素をデータ化し、その傾向と特徴を分析することを目的とする。そのような一連の調査過程を通して、人間特有の思考を成す1つ以上の言語能力の本質を理解することに少しでも近づくことができれば幸いである。以下の第2章では、本稿に直接関わる2つの先行事例研究を中心にこれまでの研究の結果を概観する。続く第3章では、本研究における調査対象と調査方法等の手順をまとめる。そして第4章では本事例研究で得られたナラティブデータの分析と考察を行う。最後の第5章では本稿のまとめと今後の課題について述べることとする。

2. 先行研究の概観

金 (2016, 2018) は、日本語を母語とする子どもが英語の使用環境に移住し、現地の学校に通いながら母語以外の新たな言語を学習し発達させていく過程で、語彙を中心に母語の喪失過程を調べたものである。両事例研究に用いられた調査の手法は同一であるが、金 (2018) では日本語を母語とする渡米当時4歳11ヶ月と10歳6ヶ月の兄弟を、金 (2016) では日本語と韓国語を母語とする渡米当時9歳5ヶ月の女兒Cを、それぞれ研究対象としている。言い換えると、金 (2018) は幼年期にモノリンガルからバイリンガルに移行するようになった子どもを、金 (2016) はバイリンガルからトライリンガルになる子どもを調査の対象としている。以下では、主にこの2つの先行研究を概観し、本稿の研究課題に繋げていきたい。

2-1. モノリンガルからバイリンガルに移行した2人の子どものL1語彙喪失

金 (2018) は、それぞれ10歳6ヶ月と4歳11ヶ月の時に日本からアメリカに渡った兄 (E) と弟 (Y) を対象に、アメリカ滞在期間中の約2年間、英語

(L2) の学習と発達が進む中、母語である日本語 (L1) の語彙産出を中心に喪失の傾向と過程を調べたものである。L1 語彙産出における喪失の影響を調べる方法として、パソコンのスクリーンに映されたイラストを見てその名前を言い当てる Picture Naming Task (PNT) の手法を用いた。そして、PNT のデータ分析のほか、日本語の物語の理解力を測るために調査開始時とアメリカ滞在13ヶ月目の2回に分けて実施した Comprehension Test の結果⁷⁾ も合わせて考察を行った。

1人目の被験者の兄のEは、渡米前は日本の公立小学校の5年に約3ヶ月通っていたが、アメリカに渡ってからは、現地小学校の5年生に編入している。日本での教科学習の成績は平均並みで、読書は嫌いではないという。スポーツは大好きで、特に野球とバスケットボールはアメリカに渡ってからもクラブ活動等を通して継続していた。家の外でのEは、大変大人しく、親のいないところでは歳の離れた弟の面倒を見ることのできる責任感の強い兄でもある。大らかでポジティブな性格の持ち主ではあるが、渡米から1年間は現地の学校での英語学習と補習、そして終日土曜の日本語学校の並行はやはり負担になっていたようで、1年日以降は土曜の日本語学校を辞めることになった。英語の学習は、渡米してから現地学校のELL (英語の補習授業) クラスを通して行っていて、放課後は週に2回ほど日本語母語話者のチューターから補習を受けるようにしていた。英語の発達は語彙と文法理解のレベルから徐々に進んでいたが、日本の学校以上に現地の学校生活を楽しんでいる様子であった。

一方の弟のYは、渡米して間もなく満5歳になり、兄のEの通う学校の付属幼稚園に通うことになった。大変明るい性格の持ち主で、幼稚園の初日から早速周りの子の行動を真似て、給食時に嫌いな牛乳を断るなど、好き嫌いもはっ

7) 調査の結果、2人の日本語による物語の理解力には、滞在期間の経過に伴う影響は特に感知できなかった。これは、多数のL1 (L2) 喪失関連の先行研究の見解と一致するものである。cf. Slobin, D. I., Dasinger, L., Kúntay, A., & Toupin, C. (1993), Tomiyama (2000), Hirai (2002)

きりしている。兄同様、アウトドアでの活動が好きで、運動神経も良く、競走などで負けると大変悔しがるタイプである。調査の時は、Yの方から幾度も「俺は英語はしゃべれないよ」「日本語しか分からない」といった言葉を掛けられていた。現地での滞在期間が6ヶ月、1年、1年半と経過していく中でも「俺は日本語しか話せない」という言葉は続いていた。渡米時のYの日本語は、時間をかけて一文字ずつひらがなを追いながら読む程度の読解力で、1人で文字を全て書いていたかは定かではない。兄のEの方は、渡米から1年間は定期的に土曜は終日、日本語学校に通っていたが、弟のYは、家庭内で保護者と一緒に日本語の本を読んでひらがなを書く練習をする程度の日本語学習が行われていた。

YとEは、4人家族で、2人の保護者がいる。保護者①は、長年の英語使用国での生活経験を持ち、現地では英語が主流となる専門職に就いている。保護者②は、主に家庭内で家族の世話をし、日本語のモノリンガルである。そのため、家族内での会話はほぼ日本語になっていて、YとEは、放課後の家庭内での大半の時間を保護者②との会話に充てている。言い換えると、2人の子どもの家庭内での言語は、日本語が主流として維持されていることになる。

調査に際し、渡米時の年齢と日本語での学習経験の有無を基準にして、2人のL2の発達とL1の語彙喪失の過程は、大変違う様子を示すことになる予想された。つまり、渡米後間もなく5歳になったYは、自然習得に近い形でL2を習得していく反面、比較的早い時期からL1の語彙喪失が予想された。反対に、10歳6ヶ月になるまで日本語で学校教育を受けていたEの方は、渡米先でのL2学習が始まってから比較的長い時間をかけて現地学校の教科学習に挑んでいくことになると考えられた。その一方で、母語である日本語は、接触時間と学習機会の減少により、一時期の喪失の傾向は現れるにしても、渡米時の母語の能力を最小限維持する程度で喪失の傾向は留まることが予想された。

約2年間に及ぶEとYのPNT発話データの分析の結果、程度と時期の違い

はあるが、2人とも喪失の影響とも見られる様々な特徴を示していた。例えば、母語で言葉を思い出せなくなる結果としての「無反応」、L2の代用、フィラーの多用、反応時間の遅延、言い間違いや言い淀みなどが挙げられる。特にYにおいては、L1語彙へのアクセス困難からくる心的負担などから、調査そのものを拒むまでの態度が示された。データ分析の結果、相対的に年齢の高い兄のEでは、滞在期間が8ヶ月頃を境にL1語彙産出の反応遅れの傾向が明らかとなり、その流れは約4ヶ月間続いたが12ヶ月前後でピークを迎えている。一方、相対的に年齢の低い弟のEの方は、L1語彙の検索失敗の結果、L2を持って語彙知識を補っていくところまでL1の喪失が進行するようになった。また、L1の語彙喪失の傾向は、滞在期間が5ヶ月目になる頃には顕著に現れ、以降11ヶ月目を迎えるまで喪失の過程を辿ることになっていた。

考察の結果、EとYでは、L2習得においてもL1語彙の喪失においても、量と質ともに異なる傾向を示すことが分かったが、その背景に2人の渡米時の「年齢」が決定的な要因であると考えられた。次に、2人の家庭ではL1の使用が維持されていたことと、L1を介してL2学習を補っていたこともL1喪失の傾向を停滞させる要因であると考えられた。総合すると、L2が主流である言語使用環境下でL1喪失は一方的に進行するのではなく、滞在期間とともに進んでいくL2の発達程度にも影響を受け、停滞期または安定期とも見られるプロセスを辿るものと思われる。つまり、家庭内での母語使用の結果、新たなL1語彙の習得と発達も現れ、次第にL1喪失の傾向は収まり、一定のレベルでL1の語彙が維持される形で安定期に入ったと考えられる。

2-2. バイリンガルからトライリンガルに移行した女兒Cの母語の語彙喪失

金(2016)は、生後18ヶ月で日本に渡ってから韓国語と日本語を同時に習得しながら育った女兒Cを対象に、満9歳5ヶ月で渡米してから2つの言語(韓国語と日本語)に現れた語彙喪失の傾向と過程を調べた。渡米時のCは日本の小学校3年次に半年間通っていたが、それまでの2年間は韓国の小学校に

在籍していたため、日本語と韓国語のいずれにおいても不自由なく読み書きができるようになっていた。

Cの韓国語と日本語における語彙喪失を調べるに当たって、渡米から1ヶ月半が経過した時点で Pretest を行い、Cの韓国語と日本語での語彙力を調べた⁸⁾。Pretest で提示された260個の名詞のうち、韓国語でも日本語でも答えられなかったものは18個あった。そして、韓国語か日本語どちらかで答えていたが不正解だったものも18個であった。Pretest の実施結果からは、韓国語においても日本語においてもどちらが優勢言語であるかの判断はつかなかった。少なくとも Pretest に用いられた語彙に関しては、両言語間で、ある程度バランスが取られていて、一方の言語で分からないものは他方の言語で補っていることが考えられた。中には、両言語でも名前の言えなかった単語があったが、両方で命名できた単語の中にも、両言語間の相互転移の影響と見られる特徴が多数含まれていることが分かった。

渡米からおよそ2ヶ月半が経過した時点から韓国語と日本語による PNT の調査が行われ、日本への帰国直前である滞在13ヶ月目に及んでデータの収集が行われた。そのデータの分析結果と、PNT 調査開始と終了時にそれぞれ韓国語で行われた同一物語の Comprehension Test の結果、さらにアメリカ滞在期間中のCの言語使用の様子を記録した観察ノートの内容をも合わせて第3言語習得と2つの母語の喪失について考察が行われた。

調査開始の段階では、渡米時の年齢からして、Cの第3言語となる英語の習得には時間がかかることが予想された。しかし、Cは英語の音韻弁別において大変優れた理解を示し、渡米から約3ヶ月が経過した頃には1人で絵本などを

8) Pretest に用いられた単語のリスト及びイラストは、Snodgrass and Vanderwart (1980) を参考にした。de Bot and Stoessel (2000: 342) は、Snodgrass and Vanderwart (1980) の単語リストはこれまで心理言語学の多数の研究で取り上げられ、単語リストと一緒に用いられる挿絵も検証が行われていると述べている。最終的に PNT の調査に用いられた単語と挿絵は、Snodgrass and Vanderwart (1980) のほか、Philadelphia Naming Test で用いられた単語と絵が複数含まれている。

音読できるようになっていた。なお、渡米から半年が経過した頃に実施された ELL 受講者向けの英語習熟度テストの結果⁹⁾からも、C の英語の読解力が短期間に急速に伸びたことが分かる。この結果については、韓国語と日本語の読み書き能力が英語の習得に有効に働き、相乗効果を生み出していたものと考えられる。

一方、英語への接触と使用機会が増えていくことにつれ、C の韓国語と日本語における語彙喪失の傾向は、滞在3ヶ月が過ぎた頃から観察されるようになった。この時期は、C の英語の発達が明示化されるようになった時期と重なる。母語喪失の傾向と見られる産出語彙の特徴として、「無反応」をはじめ、「反応時間の遅れ」「音韻の変化と発音ミス」「2つの言葉のミキシング」「意味の混同」「フィラーの挿入」などが挙げられた。さらには、韓国語・日本語・英語がそれぞれ混ざるコードミキシングの例も観察された¹⁰⁾

他にも、提示されたイラストと関連性のある別の単語¹¹⁾や一般化された言葉を用いたり、時には全く関係のない語を話したりする例が多数現れた。C の L1 語彙喪失の傾向は、韓国語と日本語で類似しているが、喪失の見られる語彙そのものまで同一ではない。しかし、データ分析の結果からは、滞在期間が半年を迎えた頃になると、日本語の方で反応遅延の傾向がより顕著に進むことが考えられた¹²⁾最後に、本研究の調査開始時と終了時にそれぞれ行われた韓国語の理解力テストの結果では、滞在期間の経過に伴う韓国語の物語の理解には、特段目立つような変化は見受けられなかった。

9) 6段階の習熟度判定において、C の Speaking の結果は 2.1 (emerging) で最も低いレベルであったが、Reading は 5.2 (bridging) の評価となっていた。Listening と Writing の結果をも含む総合評価は、Speaking の点が低いこともあって 4.2 (expanding) であったが、到達レベルである 6 (reaching) になるまでは平均して2年ほどかかるという。

10) バイリンガルまたはマルチリンガルのコードミキシングについては言語切り替えコスト、コグニティブ・コストといった考え方が多数の先行研究 (cf. Xavier Aparicio and Jean-Marc Lavaur, 2013; Baker, C., 2011; Fred Genesee, 2001) で示されている。

11) 例えば、「ダチョウ」を「鳥」、「芋虫」を「虫」と答えたり、カタカナや同義語を用いたりする。これは、発音の似ている言葉が連想されてしまい、正しい語にたどり着くのを妨げてしまうという考え方（「マラプロピズム (malapropism)」）で理解することもできる。

本事例研究の結論として、バイリンガル児童の第3言語習得には一種のバイリンガルの効果とも言える正の転移 (positive transfer) が見られることが分かった。一方で、相対的に年長の子どもであっても、新しい言語の習得環境におかれ、自然に母語との接触、使用量が減少していくと、2つの母語のいずれにおいても語彙の喪失が現れた。さらに、母語間または第3言語と2つの母語間で、音韻をはじめとする様々なレベルで言語間の相互転移や干渉の影響が見られることが分かった。

3. 調査の手順

前章でまとめられた先行事例研究の結果を踏まえ、本稿では、Cのアメリカ滞在期間中に収集されたナラティブデータをもとに、産出語彙のほか、物語に現れた2つの母語の統語構文上の喪失の傾向とその特徴を調べる。韓国語と日本語それぞれの文レベルのデータを分析することで、2つの言語間のハイアラーキー（例えば、どちらの一方の言語がより優勢であるかどうか）の関係を理解するとともに、韓国語と日本語の間の相互転移の様相やその特徴についても考察を深めたい。

本稿の調査の手順として、まずは、金（2016）を再度引用してCの渡米前の2つの言語発達の背景を詳述し、さらに渡米後の約13ヶ月間の滞在期間中、特にCの母語である韓国語と日本語との接触量及び使用機会における変化などをまとめる。続いて、ナラティブ手法¹³⁾を用いて行われたデータ収集の一連のプロセスについて述べることにする。

12) この結果についてはさらなる慎重な検討が求められる。前述したように、Cの渡米後の韓国語と日本語における語彙力の比較では、どちらの言語がより優勢であるかの判断はできなかった。単純に日本語の語彙産出の方でより反応時間がかかることからすると、日本語の方が韓国語より優勢言語であるため、一種のコードスイッチング・コストがかかっているとの見解もあり得るが、第3言語として新たに発達の進んでいる英語の影響も看過できない。

3-1. 調査対象

満2歳になる前から2つの言語に触れ、各々の言語が優勢に使われている使用環境を行き来しながら成長した韓国語と日本語のバイリンガルのCは、9歳5ヶ月の時に渡米して約13ヶ月間現地の小学校に通いながら第3言語として英語を習得するようになった。以下に、渡米前のCの2つの母語の発達過程と個別言語の能力についてまとめた。

表1 Cの渡米前と渡米後の言語使用状況¹⁴⁾

使用言語 Cの年齢(居住地域)	韓国語	日本語	英語
生後から18ヶ月目まで(韓国)	99.9%	0.1%	0%
18ヶ月～2歳(日本)	90%	10%	0%
2歳～3歳(日本)	70%	30%	0%
3歳～6歳(日本/韓国)	40%	60%	0%
6歳～7歳(日本/韓国)	20%	80%	0%
7歳～9歳(韓国/日本)	90%	10%	0%
9歳～9歳5ヶ月(日本)	10%	90%	0%
9歳5ヶ月～10歳5ヶ月(米国)	15%	15%	70%

そこでまずは、年齢別の居住先(国)を基準に、家庭や保育園、幼稚園、さらに小学校での各言語との接触・使用機会を総合して、韓国語・日本語・英語の順¹⁵⁾で、各言語の使用頻度(インプット量)を示すことができる。前項の「表1」で示されたように、Cの滞在先と言語の使用頻度には密接な関係があ

13) 山本他(2014:71)で紹介された Berman and Slobin (1994) の記述を要約して再引用すると、ナラティブ(narrative)とは、聞き手が筋を追いやすように物語の構成に気をつけて話をする事である。正確な文法力がないと上手にナラティブを行うことができないため、モノリンガルであれバイリンガルであれ、子どもがナラティブ能力を発達させるには、語彙力と文法力を身につけて初めて可能になる。一定レベルの語彙力と文法力に加え、ワーキングメモリーも不可欠となる。そのため、ナラティブ能力の発達には4、5歳になる頃まで起こらないとされる。

14) 金(2016:246)の「表1」を再構成した。

15) 単純に各言語への接触順で考えると韓国語>日本語>英語になる。

る。しかし、居住環境のほか、Cの家族構成や家庭内での言語使用の様子もまた使用頻度の算出に関わる重要な基準になっている。そして主に同一生計をなすCの2人の保護者は、生活環境（滞在先）によって若干関わり方も変わってくるのが特徴的である。Cの保護者2人のうち1人は、韓国語と日本語の後期バイリンガルで、日本で働いていて、家庭以外では普段日本語を使用する（以下、「保護者①」とする）。もう1人の保護者②は、韓国語のモノリンガルであり、主に家庭内でCの世話をしている。初来日以来、保護者②はCとともに定期的に韓国と日本を行き来しているが、特にCが韓国で滞在する間は、保護者①は日本にいたることが多く、結果的にCの日本語の使用機会は激減することになる。

Cには兄弟はいないが、韓国の居住先では3歳年上の従姉と大半の時間を過ごしていた。さらにCが2歳から3歳の時、その従姉が家族3人で来日し、Cと一緒に暮らしていたことで、滞在先が日本ではあるが、言語の使用面では韓国語が7割を示す結果になっている。一方で、Cは2歳になってから約3ヶ月間保育園に通うことになり、家庭以外の場所で本格的に日本語のインプットを受けるようにもなったと考えられる。満3歳からは日本の幼稚園に通うことになったが、5歳までの間、夏休みのような長期の休みのほか、およそ3ヶ月おきに保護者②と韓国に帰り、数日から数週間に渡って過ごすようになった。特に、夏休みを挟む長期休暇の期間中は韓国の幼稚園に通うこともあった。小学校の入学前の段階で、保護者①とは日本語、保護者②とは韓国語で会話する習慣が出来上がっていた。さらに、満5歳になってからは主に日本の幼稚園を通して日本語の読み書きの基礎を身につけ、小学校に入学した頃には、ひらがなの読み書きがある程度できるようになっていた。

満6歳になって間もなく日本の公立小学校に上がり約11ヶ月在籍するが、満7歳から9歳になるまでの2年間は、韓国の小学校に通うことになった。韓国の小学校に入るまで、Cの韓国語の読み書きはまったくの未習の状態であったが、現地の学校に入って1ヶ月が経たないうち、自然と韓国語の読み書きが

できるようになっていた。反対に、韓国の現地学校に通って約2ヶ月が経った頃には、Cの口から日本語を話すことはなくなって、自分は日本語がしゃべれないということを言っていた。しかし、保護者①の話す日本語は問題なく理解できていた。

韓国の小学校に通う2年間は、長期休みになると、今度は日本で休みの期間を過ごすようになった。韓国の小学校に入ってから5ヶ月ほどが経ったときにまた日本に一時戻ることになったが、約1週間が経過した時から徐々に日本語の産出が見られるようになった。その後も、Cが満9歳になるまで、学校のある時は韓国で韓国語だけの生活を送り、夏と冬の1ヶ月以上の長期休みは日本で生活するパターンが続いた。その間、韓国語は確実にCの優勢言語となっていたが、日本語の発話困難が再び現れることはなかった。

Cが満9歳になってから数週間後に、今度は日本の小学校3年生に編入することになった。それからアメリカに渡るまでの約5ヶ月間、日本語のインプットは最大になり、優勢言語も韓国語から日本語に移行されるようになった。また2年間の空白があったにも関わらず、日本の小学校での教科学習に遅れや困難は見当たらず、漢字の学習ではクラスの平均以上の好成績を修めていた。一方、渡米前の約5ヶ月間、韓国語は家庭内での使用に限られることになったが、特に運用面での衰えなどは見られなかった。

ここまでの一連の経過を総合して考えると、渡米前のCは、韓国語、日本語の両方において年齢相応の学習能力を十分備えていたものと判断できる。もう1つCの言語使用において特徴的なのは、韓国語と日本語で必要に応じてたまにコードスイッチングをすることはあったが、文中や語中に2つの言語を混ぜるといったコードミキシングは、幼い頃にクセのように使っていた特定の表現を除くと、減多に観察できなかったことである。Cと同じく韓国語と日本語のバイリンガルである保護者①は、主にCを相手に話す時は、頻繁にコードミキシングやコードスイッチングをしていたが、Cはそのことを「大変おかしな話し方」と言っていた。

Cが満9歳5ヶ月になったとき、今度は保護者①と2人で先にアメリカに渡り、保護者②は後からアメリカに合流したうえ、全体の滞在期間中の約5ヶ月間を一緒に過ごすことになった。また韓国の従姉がアメリカの滞在先に訪れ、長期の休み期間をともに過ごしたり、不定期的であるが韓国と日本の知人等がそれぞれ訪れ、短くは1週間から長くは2週間ほど一緒に旅行をしたりすることもあった。一方、Cのアメリカ滞在期間中は、同時期日本から家族でアメリカに渡った隣人との付き合いが続いたことで、韓国語のほか、日本語の使用機会も一定して維持されることになっていた。

Cは、渡米して数日後から現地の小学校に通うことになったが、クラスの中には韓国語も日本語も話せる人がいなかったため、学校生活に慣れるまでかなりの言語不安を経験し、ストレスを訴えることもあった。それとは反対に、学校に通い始めてすぐの頃から放課後に迎えに来る保護者①に対して英語のみを使うことを求めたり、自分の英語を上達させるためにもなるべく英語で話しかけて欲しいと言ったりと、英語習得への強い気持ちを示すこともあった。

英語の習得では、わずかな期間で英語の音韻構造を理解し、1人で絵本などを読めるようになっていた。内気な性格のため、自分から積極的に話しかけることはあまりないが、クラスメートの話や授業内容の理解においては順調に習得が進んでいく様子が窺えた。現地の人と会話を交わすところで、保護者①が間違っただけの内容をCが直すこともあるなど、約半年間の滞在期間中にCの英語は予想と期待以上に伸びていることが分かった。また学校の教科学習においても、順調に理解が進んでいき、1学年が終わる頃には、長文の不慣れなテーマのエッセイを読んで問題を解く課題を除き、短い作文をする程度のものであれば1人でおよそその宿題をこなせるまでに英語が上達していた。

3-2. ナラティブによる物語産出タスクの実施

構文レベルの発話において、語彙のほか、文法能力に関わる母語喪失の傾向

を調べるために、韓国語と日本語でそれぞれナラティブ手法による物語を産出してもらい、ICレコーダーで録音した。その後、言語別にナラティブの結果を文字起こしした上、文字化されたデータの分析を行う。ナラティブに用いたのは、チャーリーチャップリン主演の白黒の無声映画で、長さ3分26秒の「The Lion's Cage」である。この映画のストーリーは、以下のようである。

サーカスと見られる場所で男（チャーリーチャップリン）がロバを怒らせてしまい、ロバに追われるシーンから映画が始まる。ロバに追いかけれられ怖くなった男が走り出し、たまたま近くにあった階段を上って中に入ってみるが、運悪くもそこはライオンの檻であった。男はびっくりするが、幸いにもライオンは眠っていた。男はライオンが起きないうちにその場を離れようとし、檻のドアを開けるために手を伸ばしてみるが、鍵がかかってしまい、逆に檻の中からはドアが開かなくなってしまふ。困惑した男はハンカチを取り出して檻の外へ振ってみるが誰も助けに来る人はいなかった。そこで男は、檻の中にあった別の小さな扉を見つける。ライオンから離れるためには檻から出ていかなければならないので、男はその小さな扉を持ち上げそこから出ようとする。しかし、扉の向こうは別の檻になっていて、虎が動き回っていた。男はびっくりして素早く扉を閉めた。慌てて小さな扉を閉めた時に側にあったトレーに体をぶつけてしまい、入っていた水をこぼしかけた。幸い水の入ったトレーを元のところに戻すことができた瞬間、今度は突如子犬が檻の前に現れ、吠え始める。男はライオンが起きることを恐れて子犬に吠えないようにとお願いをする。そこへ今度は女が檻の前に現れ、檻の中にいる男を見つける。男はその女に檻のドアを開けるようお願いするが、ショックのあまり彼女は男の前で気絶してしまう。男は先ほどの水の入ったトレーを持ち出して気絶した女を起こそうと必死に水をかけてみる。しかし、女よりも先にライオンが目を覚ましてしまい、すぐさま男に近づくと匂いを嗅ぎ始める。どうやらライオンは男にはあまり興味のない様子で、噛みつく事もなく元のところに戻るとすぐにまた横になって体

を左右に転がし出す。そこで女が起き上がるとすぐに檻の外からドアを開けた。そして男に早く檻から出てくるように話しかける。しかし、ライオンが自分を襲わないと思った男は、女の前で自分の勇敢さを自慢したくなり、ライオンの方に近寄る。そこへいきなりライオンが男に吠えかかった。男はびっくりして全速で檻の中から逃げ出す。檻の外にいた女はすぐに檻のドアを閉めた後、走っていく男の後ろ姿を追っていく。すると、男は細長い棒（高飛びやサーカスなどで使われるポール）の頂点まで登っていた。男は何やら高いところでサーカスをしているような仕草を見せながら楽しんでいるように振る舞う。女が降りてくるよう話しかけると、男はポールから滑り降り、地面に座ったまま女に向かって挨拶をする。(約1,000字)

ナラティブタスクの手順として、Cには上記の無声映画を見せ、動画の流れに合わせて映画の内容を韓国語または日本語でナラティブする（動画の物語を口述する）ように指示した。続く「表2」と「表3」は、それぞれのナラティブタスクが行われた時のCのアメリカ滞在期間と産出した文字数、センテンスの数、ナラティブにかかった総所要時間をまとめたものである。例えば「表2」のK1は、韓国語で行われた最初のナラティブタスクを意味し、この時のCのアメリカ滞在日数¹⁶⁾は1ヶ月3週間2日(1m 3w 2d)が経過していることになる。韓国語の初回のタスクが行われてから約2週間後に今度は日本語によるナラティブを行った。以降は、韓国語も日本語もおおよそ1ヶ月おきのペースで繰り返し同様のタスクを行った¹⁷⁾。「表3」のJ11が最後のナラティブ(日本語)になっているが、この時のCの滞在期間は1年と3週間に及んでいる。日本語と違って韓国語は分ち書きで表記されるため、1回のナラティブに用いられた文字数の他、意味の固まりとしてのチャンクの数も両括弧の中に

16) ナラティブタスクの実施前日までの日数を滞在日数として換算した。

17) 韓国語のデータの一部（滞在9ヶ月を過ぎた頃に実施された分）が消失されたため、「表2」のK7（滞在期間約8ヶ月）とK8（滞在期間約10ヶ月）の間には約2ヶ月の開きがある。

表2 韓国語によるナラティブ産出時の滞在期間と産出文字数など

No.	滞在期間(月 週 日)	文字(チャンク)数	センテンスの数	所要時間(mm:ss)
K1	1m 3w 2d	489 (149)	42	3:10
K2	3m 3d	711 (220)	33	3:23
K3	4m 1w 1d	847 (269)	44	3:22
K4	5m 5d	856 (248)	40	3:24
K5	6m 5d	780 (233)	34	3:20
K6	7m 6d	825 (247)	39	3:24
K7	8m 5d	968 (268)	50	3:22
K8	10m 1w	852 (227)	51	3:20
K9	11m 1d	755 (195)	47	3:15
K10	12m 1w	798 (210)	51	3:23

表3 日本語によるナラティブ産出時の滞在期間と産出文字数など

No.	滞在期間(月 週 日)	文字数	センテンスの数	所要時間(mm:ss)
J1	2m 3w 3d	897	33	3:26
J2	3m 3w	795	28	3:25
J3	4m 3w 1d	871	38	3:25
J4	5m 2w 6d	941	46	3:23
J5	6m 2w 6d	910	39	3:24
J6	7m 3w 1d	917	41	3:22
J7	8m 3w 4d	843	44	3:22
J8	9m 3w 1d	835	42	3:23
J9	10m 3w	863	50	3:21
J10	11m 3w 1d	762	51	3:22
J11	12m 2w 6d	808	45	3:20

示している¹⁸⁾

ナレーションに用いられた無声映画は、Cにとっては飽きずに見られる大変楽しい内容であったと思われる。韓国語と日本語を合わせると、タスクが行われた約11ヶ月間、おおよそ2週間おきに同一動画を見て物語を再現することになる。当初は何度も繰り返し見ることで内容に飽きて嫌がるのが懸念されたが、むしろ何度も繰り返し見ているにも関わらず、同じシーンで毎度笑い出したり、タスクの後にはチャーリーチャップリンの演じる別の動画を自ら探したりもして大変楽しんでいる様子であった。

次章では、ナラティブで得られた発話産出データをもとに、語彙と統語構文を中心に韓国語と日本語のそれぞれにおける喪失の傾向と特徴をまとめた上、本稿の考察につなげたい。

4. ナラティブデータの分析と考察

4-1. データの分析

ここでは、ナラティブが行われた滞在期間(LOR)の順に沿って、韓国語「K1 (LOR-1m 3w 2d)」と日本語「J1 (LOR-2m 3w 3d)」が交差するようにはなるが、滞在期間の経過とともに産出された各ナラティブの特徴をまとめたい。本章では計11回分の日本語のナラティブ産出データを「表4」～「表14」にまとめて提示する。一方の韓国語のデータ(計10回分)は、便宜上「付録」の方に収めた。

本稿の第2章で概観した金(2016, 2018)の語彙喪失に関する事例研究では、

18) 韓国語(「表2」)と日本語(「表3」)ともに、産出された文字(チャンク)数とセンテンスの数はMSワードソフトの文字カウント(スペースを除く)の結果を示したもので、正確に確かめられた数値ではないことを断っておきたい。特に、韓国語の産出におけるチャンク数は、必ずしも「意味をなす」単位としての固まりではないことを強調しておく。しかしながら、タスクごとに産出された文字数とセンテンスの数は、Cの発話産出量を数値化にして現わせるメリットがあるため、時間の経過に伴う発話の量を一目で比較できるという意味では参考に値すると考える。

喪失が見られる語彙とその時期を特定するために、PNTの前にPretestを行っていた。しかし、ナラティブにおいては、1つの動画を一定の期間において言葉を変えながら繰り返し物語を産出していくため、あえて事前の調査などは行っていない。そのため、最初に行ったK1は、以降のデータと比べるとストーリーの予想が全くできなかつたために、構文のスタイルも、一文の長さも、産出された発話量も、明らかに異なっている。何よりも、動画を見ながら言葉を吹き込み、物語を完成していくといったタイプのタスクを経験したことがなかつたために、文と文をつなぐ際、長いところでは4秒以上のポーズ¹⁹⁾がかかることもあった。つまり、初めてのナラティブでは、動画のストーリーに集中しすぎて言葉を発するタイミングを上手く捕まえないまま次のシーンに画面が切り替わってしまい、結果的に内容が途切れるようになっている。しかし、2回目のJ1からはストーリーの展開が分かっている上でナラティブが行われるので、初回に見られた文間のポーズは明らかに減少している。

(1) K1 (1m 3w 2d)

最初のK1のタスク開始前にCには簡単なやり方を韓国語で説明した。K1では全部で42の文単位の産出が得られたが、著者もCと一緒に動画を見たためか、Cの発話には登場人物である「男」と「女」が説明から省かれていて、動画を見ていない人にとっては動作主や主体が分からない語りになっていた。統語構文上の特徴としては、最初の発話から「Ummm (#1)」という英語のフィラーが挿入されている。これは、おそらく動画の登場人物がCにとって「外見の異なる外国の人」のイメージをしているため、英語の反応がまず先に現れたのではないかと思われる。続く発話でも「Oh, No... (#3)」「Umm (#4)」「Wow ~! (#40)」のような例が見られている。そして、#11では「ライオンが起きたいです」という文法上のミスが現れている。さらに、#32では「す

19) 文間のポーズは「(+4s)」のように表示した。これは、次の文に話を繋げるまでに最低4秒がかかっていることを意味する。なお、2秒以上のポーズは、ナラティブで語られる物語の中では長く感じられることから、意味をなすものとして表示している。

ると待っていた人が、生き返りました」と言っていて「気絶していた女が目覚まして起き上がった」シーンの説明には符合しない、表現上のミスとして捉えられる。

以上の韓国語による最初のナラティブが終わると、Cはすぐに日本語に言葉を切り替え、日本語を話していた。

(2) J1 (2m 3w 3d)

「表4」にまとめられたJ1のタスクの開始前に1回目とは少しやり方を変えることを日本語でCに伝えた。そして、著者はCと向き合って動画が見えない位置に座り、動画のシーンを詳しく説明するように指示した。そうすると、最初の語りから「あるおじさんが」という主語が登場するようになった。#8～#10は、意味そのものが伝わらない語り(非文)になっていて、韓国語からの転移の可能性もないものと考えられる。また、#11の前に来るシーンの説明が抜けているため、語りがスムーズに繋がらなくなっている。#18では「あくび」の発音ミスが見られ、#21では#10と同じ表現が使われているが、「ぞっとする」といた表現の誤用のようにも考えられる。#24では助詞「に」の誤用、#28では「飛びかかって来たので」という意の言葉が上手く表現しきれなかったように考えられる。#30は単純に単語選択のミスと思われる。しかし、どのミスにおいても、韓国語に起因する「転移」の例ではないように見受けられる。

(3) K2 (3m 3d)

続いて滞在期間が3ヶ月を過ぎた頃に行われたK2の産出データでは、初回に比べると一層具体的なナラティブが行われていることが分かる。すでに2回同じ動画を見ているので、文の前後の接続もスムーズである。ポーズの挿入については、ここでは、口述が先に終わっていて動画の場面が変わるのを待っているためのものであると思われる。前回の日本語(J1)のナラティブでは多数の統語構文上のミスが現れていたが、K2の方では、文法上のミスと思われる例は1つも見当たらなかった。しかし、語彙面では複数の点が指摘に値する。

表4 J1 (2m 3w 3d / 03:26)

- 1) あるおじさんが馬に追っかけられて、なんかどっかのかごに行ったんですけど、そこに何とライオンがいて、恐る恐る逃げようと思いました。
- 2) そして、**あの**、逃げようとしたんですが、ドアに鍵がかかってしまいました。
- 3) 外から開けようとしたんですが、届きません。
- 4) ライオンが起きようとしているみたいなので、いきなり怖くなって助けを求めました。
(+2s)
- 5) それから、**ドア**、そっとそっとライオンの近くに行って、そして裏口から出ていこうとしました。
- 6) 何とそこには、虎が待っていて...(笑)
- 7) でもまだライオンは寝ていて安心です。
- 8) そして**ゆっくり**としたとき、水を落としてしまいました。
- 9) ライオンが**音**に聞いてしまいました。
- 10) 男の人が**そっと**いると、**助けを求め**にきてくれるワンちゃん came ました。
- 11) でもこのままじゃライオンが起きてしまうと思いました。
- 12) 男の人は、頼む、静かにしてくれ、と言いました。
- 13) だが、犬は言うことを聞きませんでした。
- 14) ライオンが起きそうです。(笑)
- 15) なので、おじさんは犬を足で蹴りました。(+2s)
- 16) すると、早くドアを開けてくれと助けに来た女のの人に求めましたが、女の人は気絶してしまいました。
- 17) なので、早く助けを求めないと、思いました。
- 18) すると、とうとうライオンがおくびをしながら起きてしまったのです。
- 19) すると、急いで男の人は早く逃げていきました。
- 20) 男の人はびっくりしたんですが、ライオンは近づいてきます。
- 21) 男の人は**そっと**して、怖くなりました。
- 22) だが、良かったことにライオンは何ともなく、**もとに**、**席**に戻りました。
- 23) すると、まだ生きてるぞーということを確認してから、ホッとしました。
- 24) ライオンは、あまりに悪そうになくて、安心しました。
- 25) すると、**気絶で**、**起きた**、**おばさんが早く**、**助け**に行きました。
- 26) でもあのライオンは全然怖くなくて大丈夫だと、あのおじさんは言いました。
- 27) でも外からおばさんがカギを開けてくれましたが、大丈夫だと言っています。
- 28) おばさんが信じないから一回だけライオンのそばに行ってみると、今度は何気なくライオンがとってきて、素早く飛んで行ったのです。
- 29) すると、あっという間に逃げていました。
- 30) おばさんが、**あの**、追いかけて行ったときは、**遠い**ところに上がっていました。
- 31) おばさんが降りてきてと言って、**あの**、そのおじさんは、**あの**、きれいに降りてきました。(+3s)
- 32) すると、**あの**、おじさんが降りてきました。
- 33) おしまい。

まずは、#1の主語「おじさん」が突如#4, #6, #7では「男のおじさん」に変わっている。#7以降は再び「おじさん」に戻るが、最後の#33で「男のおじさん」の表現が再度現れた。物語の中には「おじさん」と「おばさん」が繰り返し登場するが「おばさん」については誤用が見られない。次に、#9, #18, #20, #21, #24では「ライオン」が「虎」に変わっている。しかしその前後では「ライオン」が正しく述べられている。さらに、#29は発音のミスもしくは不適切な表現の使用である可能性の両方が考えられる。上記のほか、K2のデータでは、文中に「その」に当たる韓国語のフィラーが非常に多く挿入されていて、意図的に言葉を区切って発音する部分（「,」の入ったところ）と言葉が繋がらないために文中にポーズ（「…」が入ったところ）が頻繁に挿入されるほか、同じ言葉を繰り返し使う「反復」の傾向も明らかである。Cは「男のおじさん」「ライオンと虎の混用」といった誤用に自ら気づかない様子であった。

(4) J2 (3m 3w)

滞在期間が3ヶ月と3週が過ぎた時にJ2のタスクが行われた。開始前は日本語で話を交わしていたが、#1は「Umm」という英語のフィラーで始まっている。#10では発音のミス（「このまま」）、#24では言葉の誤用（「来い」）が見られたが、およそ1ヶ月前のJ1でのような非文や意味不明な表現は見られなくなっていた。むしろここではより正確な言葉が選ばれているのがデータで読み取れる。しかし、直前のK2同様、文中の区切りやポーズ、文間のポーズの多用が見られ、思うようにスムーズに言葉を繋げられない、言葉を通して話すことに困難を抱えている様子が窺える。困難を和らげるための戦略として、文の始まりに接続詞（すると、そしたら、そして、だけど、だから）を用いるようにしていると思われるが、これはすでに前後のストーリーをよく知っているからこそ可能なことでもあることが分かる。

(5) K3 (4m 1w 1d)

滞在期間が4ヶ月を過ぎた頃にK3のナラティブが行われた。開始前は韓国

表5 J2 (3m 3w / 03:25)

- 1) Umm, おじさんが馬に追っかけられて、あるところに入っていったんですけど、そこには、ライオンが...いました。
- 2) だから、おじさんは、外に出て行こうと思いました。
- 3) 外の...ドアを...開けようと思ったんですけど、閉めてしまいました。
- 4) でもライオンはまだ寝ていました。
- 5) おじ、おじさんは、助けを求めました。
- 6) それから...おじさんは...1つ、少し、続いて、ドアを開いて向こうに出て行こうと思いましたが、そこには虎がいました。
- 7) だからおじさんは、...こっそり...出て行こうと思いましたが、水をこぼしてしまいました。
- 8) でもライオンはまだ寝ていました。
- 9) すると、犬が飛んできま、犬がやってきました。
- 10) おじさんはここまじゃライオンが起きてしまうと思いました。
- 11) だけど犬は言うことを聞きませんでした。
- 12) おじさんが頼んだんですけど犬は言うことを聞きませんでした。
- 13) だからおじさんが犬を足で蹴りました。
- 14) そしたら、おばさんがやってきて、静かにして、早くドアを開けてくれと頼んだ時、おばさんは気絶してしまいました。
- 15) おじさんは..., 助けを求めました。
- 16) すると、その時ライオンがあくびをして起きてしまいました。
- 17) おじさんは早く逃げようと思いました。
- 18) するとライオンが起きました。
- 19) ライオンがおじさんに近づいて行きました。
- 20) だけど、ライオンは、おじさんを食べませんでした。
- 21) ライオンは、また席に戻って、おじさんは..., 自分が生きててほっとしました。
- 22) そしたら、そのライオンが、怖いライオンじゃないということがわかって、...もう怖くなくなりました。
- 23) すると、気絶してたおばさんが起きて、早くおじさんを助けに、行きました。(+3s)
- 24) 早くおばさんがくれと言ったんですが、おじさんはライオンが怖くないと思いました。
- 25) そして、ライオンのところに行って、近づいてみたら今度はライオンが食べようとしたので、急いでおじさんが逃げて、...今度は高いところに登っていました。(+2s)
- 26) おばさんが、早く降りてきてと言いました。
- 27) そして...おじさんが、すごいを見せました。
- 28) するとおばさんが降りてきてと言ったので、おじさんは完璧に降りてきました。

語で言葉を交わしていたが、この日は特に大変元気な様子であった²⁰⁾ 前回の K3 からはおよそ1ヶ月が経っているが、K3 が行われる少し前から韓国語を話す機会が増えたこともあって、前回に比べると文間と文中のポーズは大幅に抑えられるようになっていた。しかし、「おじさん」の表現が正しく使われたのは#37の一度だけで、その他では「男のおじさん」のほか「男子の人」「女子の人」という表現も見られるようになった²¹⁾ また、#16と#18では「男の子」が使われ、「おじさん」「男子のおじさん」「男子の人」「男の子」の言葉が混用されていることが分かる。反対に、統語構文上では、#5の「(ドアを)閉まるようにしてしまいました」、#7の「助けて欲しいと要請を頼みました」、#10の助詞の誤用、#12の言葉の誤用、#15の文法ミス、#20の表現の誤用、#39の言葉の誤用、#44の英語使用といった多数の「逸脱」が観察されている。また、C本人はこのような誤用には意識が及ばないようにも見え、始終テンションの高い楽しそうな雰囲気でもナラティブを終えていた。

(6) J3 (4m 3w 1d)

続く J3 のタスクの前は、日本語と英語で会話を交わした。この時期の C は一人芝居でも5分以上日本語を使い続けることができなくなっていて、言葉につまずくと芝居をやめてしまう様子が幾度も観察された。しかし、年末の休暇を利用して日本から知人が訪れていたため²²⁾ 数日といった短期間ではあった

20) 間もなく学校も冬の長期休みに入る頃で、教科の学習よりも年度末のパーティーの準備等で忙しくしていた時期でもある。また、家庭内では韓国からは保護者②と従姉が年末年始を一緒に過ごすためにアメリカに渡っていた。

21) 韓国語において「男のおじさん」は明らかな誤用になるが、「男子の人 (남자 사람)」 「女子の人 (여자 사람)」はマスコミでも使われている新造語的な表現で「愛情を持たない男・女 (単なる性別で区分する意味合いも兼ねて)」の意味で用いられている。おそらく、このタスクの前に韓国から訪れてきた3歳年上の従姉からこのような「流行りの言葉」を聞いていた可能性も排除できないので、ここでは誤用とは見なさないようにした。

22) 年度末の休みに入ってそれまで続いていた通学がなくなったことから自然に英語への接触機会も減っていた。代わりに韓国からも日本からも来客があり、時期が重なることもあったので、一時期ではあるがCの日本語と韓国語の使用機会が英語より多くなった可能性がある。その結果、1ヶ月前に行われた K2、J2 の結果と比べても K3、J3 の方でより安定した発話が見られ、誤用も大幅に減少していると考えられる。

表6 J3 (4m 3w 1d / 03:25)

- 1) Uhh.. おじさんが馬に追っかけられて、あるカゴに行きました。
- 2) そのカゴにはライオンが眠っていました。
- 3) おじさんはびっくりして早く出て行こうと思いました。
- 4) ドアを開けようとしたのですが、(+3s) 逆にドアが開められてしまいました。
- 5) でもライオンはまだ眠っていました。
- 6) おじさんは、助けを求めました。
- 7) けれども誰も来ませんでした。
- 8) そしておじさんは、こそこそと動いて、もう1つのドアに行きました。
- 9) だけどそのもう1つのドアに待っていたのは、虎でした。
- 10) おじさんは、まだライオンは眠っていることに気づきました。
- 11) だけど**失敗**で水をこぼしてしまいました。
- 12) だけどライオンはまだ寝ていました。
- 13) そうすると、犬がやってきました。
- 14) 犬がワンワン鳴いてライオンが起きそうでした。
- 15) おじさんは静かにしろと言いました。
- 16) おじさんは頼むと言いましたが、犬は言うことを聞きませんでした。
- 17) すると、おじさんが、足で犬を蹴りはじめました。
- 18) すると、女の人 came ました。
- 19) 僕を、ドアを開けてくれと頼んだんですが、女の方は気絶してしまいました。
- 20) 男の方は、急いで女の方を起こそうと思いました。
- 21) するとその時ライオンが起きてしまいました。
- 22) びっくりした男の方は早く出口に、飛んで行きました。
- 23) するとライオンが起きて男の人に近づきました。
- 24) けれどもライオンは、男の方を食べませんでした。
- 25) そしてまた、自分のいた席に戻りました。
- 26) すると、おじさんがまだ自分が生きてよかったと思いました。
- 27) すると、おじさんが思ったよりライオンは怖くありませんでした。
- 28) おじさんは安心しました。
- 29) すると、意識を**取りもど**ったおばさんが早く**おじさん**を、**か**、カゴの中から取り出そうと思いました。
- 30) おばさんが早くと言いましたが、おじさんはライオンが全然怖くありませんでした。
- 31) ライオンのそばに行ってみるといいました。
- 32) そしてライオンのそばに行くとライオンに近づくとライオンが怒りだして食べようとしておじさんが早く逃げて行きました。
- 33) おじさんはなんと高いところに登っていました。
- 34) おばさんは、早く降りて来いと言いました。
- 35) だけど、おじさんは、降りて来ませんでした。
- 36) おばさんは来いと言いました。
- 37) なのでおじさんは飛びながら降りてきました。
- 38) おしまい。

が、直後に行われたナラティブの結果では、日本語の使用機会が少しでも増えたことで、ポーズと誤用が大幅に減少してきたことが示されている。まず、前回(J2)のような文中と文間の区切りとポーズは、#4の文中の3秒を超える長いポーズの挿入を除けば、かなり減少している。物語の始まりに英語のフィラー「Uhh..(#1)」が挿入され、#11の「失敗して」を「失敗で」、#29の「取り戻した」を「取り戻った」、「おじさん」を「おじいさん」と発音したミスを除くと、誤用も減っていると言える。

(7) K4 (5m 5d)

開始前の会話でCは韓国語の指示に対して英語で短く答えていた。#1～#26までは「男のおじさん」の表現が使われ続けている。途中#27～#29では「おじさん」に変わったが、以降はまた「男のおじさん」に戻っている。最後の#40は「男は…」となっていて、再び表現の仕方が変わっている。ナラティブが始まって最初の3行ほどは早口で話していたが、#4からは文中、文間のポーズが見られる。また、言葉を意味の固まりで区切って発音する（例えば、#32）傾向もところどころで観察されるようになってきている。さらに、これまでは言葉（単語）と言葉（単語）の間にポーズが挿入されていたが、ここでは語中でもポーズが入り（例えば、#18、#21、#38）、よりたどたどしく言葉が話されている印象を与える。

韓国語でも日本語でも、滞在期間が3ヶ月を過ぎた頃からナラティブに接続詞の使用が恒例化されるようになったが、今回のナラティブでは、接続詞を言った後も次の言葉が自然につながらずポーズが入る傾向が発話の前半部で観察されている。そして、これまでになかった新しい語彙のミスとして「ライオン（韓国語の発音は「サジャ）」を「りんご（韓国語の発音「サグァ）」と言ってしまうミス（#15、#17、#27、#34、#35）が繰り返し見られているが、これまで同様C自身はそのような発音ミスには気が付かない様子である。さらに、語りの途中で話の内容を変えてしまうため、前後の意味がつながらなくなる例（#15、#24、#26、#38）、言い淀みや言い直し（#17、#26、#31、

#33), 幼児語の使用 (#16, #35), その他統語構文上のミス (#1, #24, #33, #35, #36, #40) も多数挙げられる。

ナラティブの後半では、動画が終わりに近づくと、気持ちの焦りからか話がまとまらず、早口ではっきりとしない発音になるために聞き取れなくなる部分もあった。年度末の休み期間中は、韓国語と日本語の使用機会が増えてきたことで比較的安定的なナラティブが見られていたが、今回のデータからは、3ヶ月前後から検知された語彙と統語構文上の喪失の傾向が2ヶ月前とはかなり異なる様相を示していることが分かる。

(8) J4 (5m 2w 6d)

開始前の会話では韓国語と英語、日本語の順で言葉が変わっていた。録音を始めることを伝え、早すぎると言ってやや不満そうに振る舞う。ナラティブが始まって最初はゆっくりとしたスピードで話を進めていたが、言葉を一個一個区切りながら話すことが多かった。反対に物語の後半部になると、かなりの早口が変わって、動画が終わるまでに話をまとめようとして口走るようになっていた。前回の韓国語 (K4) 同様、言葉を区切って言うことや、2秒以上のポーズが文を繋げる際に挿入されることでは傾向が続いたが、文中または語中のポーズは一箇所 (#25) のみ観察されている。さらに、K4で見られたような語彙や統語構文上のミスも明らかに少なくなっている。K4からJ4の間には2週間の間隔しかない、ここまでの違いは予想外の結果でもあった。J4のタスクが実施された頃まで、韓国から訪れてきた従妹が保護者②とともにまだ滞在中であったため、日本語に比べ韓国語の使用機会の方がより多かったことも看過できない点である。#9は韓国語の転移の影響も考えられるが、単純ミスにも受けとれる。#20は物語の流れに沿わない表現上のミスに、#43は英語の日本語発音にも考えられる。

(9) K5 (6m 5d)

ナラティブの開始前、日本語と韓国語の会話が交わされていたが、Cは「疲れている」と言いながらタスクを嫌がるような姿勢を示した。そのせいか、こ

表7 J4 (5m 2w 6d / 03:23)

- 1) 男の人が、馬に、追いかけてられて、ある、カゴの中に入りました。
- 2) なんとそのカゴの中にはライオンがいました。
- 3) 男の人はびっくりしました。
- 4) そして、ゆっくり、歩いて、早く、外に出て行こうと思いました。
- 5) ドアを開けようと思いました。
- 6) けど、ドアが閉まってしまいました。(+3s)
- 7) 男の人は急いで助けを呼びました。(+2s)
- 8) そして、それから、その男の人はまた、ゆっくりと歩きました。
- 9) そして後ろにいるドアを開けました。
- 10) そして出て行こうと思ったらそこには虎がいました。
- 11) そして、おじさんはドアを閉めました。
- 12) それからおじさんは早く行こうと思うと水を落としてしまいました。
- 13) だけどライオンは起きませんでした。(+2s)
- 14) すると、犬がやってきました。
- 15) 犬がワンワンと鳴いていてライオンが起きそうでした。
- 16) ワンワンとずっと鳴いていました。
- 17) 男の人が静かにしてって言いました。
- 18) だけど犬は言うことを聞きませんでした。(笑)
- 19) だから男の人が犬を足で蹴りました。(笑)
- 20) すると女の人が助けてくれました。
- 21) ドアを開けてくれと言いましたが女の人は気絶してしまいました。
- 22) 犬も逃げて行きました。
- 23) そして男の人は、早く気絶した女の人を起こそうと思いました。
- 24) すると、ライオンが、大きなあくびをして起きてしまいました。
- 25) それに気づいて男の人は早く...逃げました。
- 26) そして、ライオンが起きて、おじさんに近づきました。
- 27) おじさんは、少しも動きませんでした。
- 28) するとライオンはなんともなく、また自分の席に戻りました。
- 29) すると、男の人は、自分が、生きていると思いました。
- 30) そして良かったと思いました。
- 31) そしてよく見たらそのライオンはあんまり怖いライオンじゃありませんでした。
(+3s)
- 32) おじさんはホッとしました。
- 33) ずっと気絶していたおばさんが起きました。
- 34) そして早く、おじさんを、カゴから出そうと思いました。
- 35) おばさんはカゴのドアを開けました。
- 36) 早く来いと言いました。
- 37) おばさんが言いました。
- 38) だけどおじさんは全然怖くないと言ってライオンのそばに行きました。

- 39) ライオンに近づきました。
 40) するとライオンは食べようとして、おじさんも早く逃げだしました。
 41) するとおばさんがその後をついていくとおじさんがとてつもなく高いところに登っていました。
 42) お、おじさんが「おはよう」しました。
 43) ヤーバイ！ グー、手を振りました。
 44) する、そして、すごいを見せました。
 45) するとおばさんはと言いました。
 46) そして、おじさんが飛ぶようにして降りてきました。

のナラティブでは産出された発話の量が比較的少なく、語中（#3, #4, #6, #10, #19, #23, #26）を始め、文中と文間でのポーズの挿入、言葉を区切りながら話すといった例が多数見られている。語彙面では「男のおじさん」と「おじさん」の使用が混用されていて、物語の中盤から「ライオン」と「虎」が混同されている。統語構文上のミスも多数続くほか、言葉がうまく繋がらなくなって話が長くなり、文末の発音が聞き取れなくなるほど意味の伝達も曖昧なまま終わってしまっている。K4に続き、喪失の傾向は発話のあらゆる面で観察できることが分かった。

(10) J5 (6m 2w 6d)

開始前の会話は英語で、Cはあくびをしてからナラティブに入った。全般的に覚えている内容を順番に再現しているような言い方である。日本語の方では、前回のJ4の傾向が続いていて、滞在5ヶ月目を境に韓国語と日本語ではナラティブによる発話の産出内容に質的な違いが表れ始めていけると言える。直前に行われたK5とだけ比較してみても、発音のほか、語彙・統語上のミス（#4, #10, #15, 23, #36）はだいぶ抑えられていると考えられる。ところどころ語中にポーズや言い淀み、不自然な言葉の区切りも見られたが、全体としては一文ずつ決まったセリフを頑張って言い切ったという印象を受ける。

表8 J5 (6m 2w 6d / 03:24)

- 1) 男の人が馬に追いかけられました。
- 2) 男の人は部屋の中に入りました。
- 3) なんとその部屋の中にはライオンが眠っていました。
- 4) だから**男の**、**人**は静かに、**ある...**いました。
- 5) そしてドアの方に行きました。
- 6) 手を伸ばしてドアを開けようとしたのですが、ドアが閉まってしまいました。
- 7) ライオンはまだ寝ていました。
- 8) だから男の人は誰か**助けて**、**くれと**、言いました。(+ 3s)
- 9) そしてまた男の人は、ゆっくり歩きました。
- 10) それから後ろの**部屋で**、**で**、**あ**、**ドア**で出て行こうと思ったらそこには虎がいました。
- 11) だから男の人は早くドアを閉めました。
- 12) ライオンはまだ寝ていました。
- 13) すると、男の人は間違えて水をこぼしてしまいました。
- 14) まだライオンは起きませんでした。
- 15) するといきなり**ワン**、**犬**が駆けついてきて**ワンワン**と鳴きました。
- 16) このままじゃライオンが起きそうだったので静かにしろと男の人は犬に頼みました。
- 17) だけど犬は聞かなくてずっと**ワンワン**と鳴きました。
- 18) だから男の人は犬を足で蹴りました。
- 19) するとおばさんが助けに来ました。
- 20) ドアを開けてくれと言ったんですけど、おばさんは気絶してしまいました。
- 21) 犬は逃げてしまいました。
- 22) 男の人は早く落ちた水でおばさんを起こそうとした時、ライオンが眠りから醒めてしまいました。
- 23) すると男の人は早く**ドアへの方**に逃げて行きました。
- 24) するとライオンが起きました。
- 25) 男の人はドアを開けようとしたが開きませんでした。
- 26) ライオンは男の人のそばに行きました。
- 27) だけど何気なくまた元に戻りました。
- 28) すると男の人は自分の**体**、**さ**、**触**ってまだ生きていることが分かりました。
- 29) すると、そんなにライオンは怖そうには見えませんでした。
- 30) すると、気絶していたおばさんが起きて、**おじさん...**が大丈夫だということに気づきました。
- 31) そして早く部屋の鍵を開けて、早く出てきてと言いました。
- 32) だけどおじさんはなんともない、と言いました。
- 33) そしてライオンが怖くないと言ってライオンのそばに行ってみました。
- 34) ライオンに近づくとライオンがおじさんを**食べるようにしたので**速く走って行きました。
- 35) そして高いところまで登っていました。
- 36) おばさんは**男の人...に**、早く、降りてくろと言いました。
- 37) だけど男の人は高いところですごいの見せました。
- 38) おばさんは降りてきて、と言いました。
- 39) そして男の人は飛ぶように降りてきました。

(11) K6 (7m 6d)

この調査が行われた日はCの喉の調子が悪く、テンションも低かった。開始前は日本語と英語を使用し、ナラティブが終わるとまたすぐに日本語に変わっていた。最初の発話では「おじさん」の表現が使われたが、その後は「男子のおじさん」「男子の人」が中盤まで続いた後、以降は「おじさん」と「男子のおじさん」が混ざるようになった。#24では「ライオン」を「トラ」と言ったミスに自ら気づき、言葉を訂正していた。#12の方でも「門（ムン）」と「水（ムル）」を混同していたが、言い直しが行われた。文中の言い淀み、言葉を区切りながらの発話、語中のポーズといった言葉の産出が自然に繋がらない傾向は続いている。しかし、以前のK4、K5に比べると、今回のナラティブでは、自分の語っている言葉にある程度の注意が払われていて結果的に語彙・統語面でミスが少なくなっていると考えられる。語彙・統語上の誤用の形態に関しては、日本語からの転移と思われるものもあれば、一時的な「逸脱」と思われるものもあるが、今回の#1（「おじさんが馬に追っかけて」）のような統語上の誤用は、以前（K4）のものが繰り返されていることが確認できた。語彙のミスは、これまでも一定の反復とパターンを示していることが分かったが、統語面ではその都度言い方が少しずつ変わってくるので、特定のミスが継続され、一定の傾向を示しているというまでの分析には至っていない。

(12) J6 (7m 3w 1d)

この時期の観察ノートによると、日本語の漢字はごく簡単なものしか書けなくなっていて、カタカナの「ヨ」を英語の「E」で書くミスも現れている。また、家でCが1人で日本の小学校の算数の問題を解く際、問いの意味が正しく理解できず、答えを間違えるといった例も見られるようになった。その文章題の言葉はごく平易なものであって、以前何度もCが解いたことのあるパターンのものであった。

J6のタスク前に韓国語で話しかけたがCは日本語で答えていた。ナラティブの#1「男のおじさんの人」は前回の韓国語の方で何度も繰り返された誤用

表9 J6 (7m 3w 1d / 03:22)

- 1) 男のおじさんの人が馬に、追いかけられました。
- 2) そして、カゴの中に入ったならそのカゴの中ではライオンが眠っていました。
- 3) なので、おじさんは、こっそり、ドアの方に行きました。
- 4) そして、ドアを開けるために手を伸ばしました。
- 5) だけどドアが閉まってしまいました。(+3s)
- 6) なので、おじさんは、助けを呼びました。(+3s)
- 7) そしておじさんが、ゆっくりと歩きました。
- 8) そして、後ろにあったドアを開けて、そのドアから出ようとしました。
- 9) するとそのドアでは虎がいました。
- 10) おじさんは早くドアを閉めました。
- 11) そして、立ったら、間違えて、水をこぼしてしまいました。
- 12) だけどライオンは起きませんでした。
- 13) すると、犬が、走ってきました。
- 14) 犬が、吠え始めました。
- 15) このままじゃ、ライオンが、起きてしまうと思って、おじさんは犬に静かにしろと頼みました。
- 16) しかし犬は言うことを聞かずにずっと吠えました。
- 17) だからおじさんは足で犬を蹴りました。
- 18) そしたらおばさんがやってきました。
- 19) おじさんは早くドアを開けてくれと言いました。
- 20) しかしおばさんは気絶してしまいました。
- 21) そして、おじさんは落ちた水が入っていたカゴの中から、水でおばさんを起こそうと思いました。
- 22) するとライオンが起きてしまいました。
- 23) するとおじさんは早くドアの方に逃げて行きました。
- 24) するとライオンが、起きました。
- 25) するとライオンが、おじさんの方に行きました。
- 26) するとライオンは何もなかったように元の場所に戻りました。
- 27) するとおじさんは自分の体を触りました。
- 28) そして食べられてないってことがわかってホッとしました。
- 29) するとライオンは怖く見えませんでした。
- 30) するとおじさんは、ため息をつきました。
- 31) すると気絶してたおばさんが起きました。
- 32) そしておばさんはおじさんを見ました。
- 33) すると早くカゴのドアを開けました。
- 34) そしておばさんは早く出てこいと言いました。
- 35) しかし、おじさんは、ライオンが怖くないと言って、ライオンのところに歩いて行ってみました。

- 36) ライオンに近づくとライオンがおじさんを食べようとしたのでおじさんは棒の方へ逃げて行きました。
- 37) すると、おばさんは、棒の上に乗ってるおじさんを見て、**おじさん**の方に行きました。
- 38) すると、おじさんが棒の上ですごいを見せました。(+2s)
- 39) するとおばさんが早く降りて来いと言いました。
- 40) するとおじさんは飛ぶように降りてきました。
- 41) おしまい。

であるが、その誤用が言葉を変え、日本語に置き換えられていることが分かる。しかし、もともとの韓国語に現れている「男子のおじさん」は、「男の人」という日本語の転移である可能性もある。韓国語と日本語は、音声を除く言語の構成体系がかなり類似しているため、相互間転移も起きやすいことが考えられる。その多くは、一方の言葉が他方に転移され、それが「誤用」になるタイプである。しかし、今回の例は「日本語の転移→韓国語（誤用）の転移→日本語（誤用）」のパターンになるため、「誤用の2次転移」または「誤用の逆転移」とも言える現象である。この誤用の例は、#1で1回だけ現れ、以降は「おじさん」に言葉を戻している。

発音のミス（#37「おじさん」）の他の統語構文上のミス（#9, #21）は、単に転移によると思われるものと、一文がやや長めの複文の処理による負担の増加が原因で生じた誤用の可能性も考えられる。その他、言葉ごとに区切りながら発音する傾向は以前から続いていて、同じ接続詞を何度も繰り返し使う過剰化も今回見られている。しかし、日本語の方は誤用の数からすると、比較的安定的な発話産出が続いている²³⁾と考えられる。誤用が少なくなると、物語の表現の正確さも増してくるようになると思われる。

(13) K7 (8m 5d)

K2よりK6まで続いていた「男のおじさん」の表現が、#1から「おじさん」という正しい表現に変わった。途中#8, #9で「男のおじさん」に変わることもあったが、以降現れなくなった。本人の中に誤用の気づきがあったという

よりは、同義語と捉え、簡潔な言い方にしている可能性が考えられる。これまでで最も長めのナラティブになってしまったため、決まった時間内に物語を終えようとする気持ちの焦りも感じられた。しかし、言葉数が多くなった分、表現上のミスも目立った。#26と#41では、発音のミスが見られたが、やはり慌てて口走った言葉が不正確に発せられたと思われる。語彙面では、#8、#9の「男のおじさん」、#13の「サジャ（ライオン）」が「サグア（りんご）」になるミスがあった。#26と#43では、それぞれ「おじさん」と「おばさん」が入れ替わるミスがあったが、すぐに訂正されている。統語面では、#1の特定の表現がK4、K6に続いて繰り返し誤用として現れている。その他、#18、#26においても文法上のミスが見られている。続いて、#35、#43、#48は日本語の転移とも思われ、#17、#26、#36では表現上のミスが見られた。また、#43の文末になると、かなりの早口で話していたため、言葉が聞き取れなくなる箇所もあった。以上から、発音・語彙・文法の誤用には、日本語の転移によるものが見られるほか、全体からすると語用論上のミスが多いことが分かった。

(14) J7 (8m 3w 4d)

#2と#3では同じ場所を表す言葉が「かご」から「箱」に変わっていて、以降も箱（#35）がもう一度使われている。発音のミスというよりは、言葉の混同と見られる語彙上のミスと考える方がより妥当に思われる。#14、#18も同様の語彙選択のミスと捉えられる。続いて#9ではJ4でもあった韓国語

23) J4~J6のデータに限って考えると、ナラティブの産出文字数は比較的ばらつきが少ないと言える。語彙・統語上の誤用も韓国語（K4~K6）とは明らかに違う傾向を示している。その理由の1つとして、日本語の物語に表現の定型化が作られていて、そのパターン（表現）通り産出している可能性が考えられる。つまり、同じ動画を繰り返し再生しているので、動画はただ順番（ストーリーの流れ）を合わせるための参考程度で、ストーリーは既に頭の中に入力され固定されていると考えられる。したがって、全く新しい表現あるいは言葉を変えながら物語を言わない限り、以降もさほど変わらない結果（データ）になることが予想される。但し、発話の流暢さや自然さはストーリーが頭の中でセットされていることは別の類になるため、以降も発音のミスや不自然さは喪失の流れで増えていくと思われる。

表 10 J7 (8m 3w 4d / 03:22)

- 1) おじさんは馬に追いかけられました。
- 2) そしておじさんはカゴの中に入りました。
- 3) その箱の中にはライオンが眠っていました。(+3s)
- 4) おじさんは、ドアを開けて出て行こうと思いました。
- 5) だけどドアが閉まってしまいました。(+2s)
- 6) ライオンは寝ていました。(+2s)
- 7) おじさんは助けを求めました。(+5s)
- 8) そしておじさんは、歩き出しました。
- 9) そして後ろにいるドアを開けました。
- 10) そしてそのドアから出て行こうというところでは虎がいました。
- 11) おじさんはすぐにドアを閉めました。(+3s)
- 12) そして、おじさんが立ったら、水が落ちてしまいました。
- 13) ライオンはまだ寝ていました。(+2s)
- 14) すると犬が、鳴き、始めました。
- 15) するとおじさんはライオンが起きると思いました。
- 16) なので犬に静かにしろと言いました。
- 17) だけど犬は言うことを聞きませんでした。
- 18) 犬は、ずっと鳴きました。
- 19) するとおじさんは犬を足で蹴りました。(+2s)
- 20) するとおばさんが助けにきました。
- 21) おじさんはドアを開けてくれと言いました。
- 22) おばさんは気絶しました。
- 23) 犬は逃げました。(+2s)
- 24) するとおじさんは、落ちた水で、おばさんを起こしました。
- 25) するとライオンが起きてしまいました。
- 26) するとおじさんは、びっくりして、早くドアの方に逃げ出しました。(+2s)
- 27) ライオンがおじさんの方に歩いて行きました。
- 28) だけどライオンはそのまままた…戻ってきました。
- 29) するとおじさんも自分の体を触りました。
- 30) 生きていることが分かりました。
- 31) するとライオンは怖くなく見えはじめます。
- 32) するとおじさんはため息をつきました。
- 33) するとおばさんが起きました。
- 34) するとおばさんはおじさんがいるのをみました。
- 35) おばさんは早く箱のドアを開けました。
- 36) おばさんは早く出てこいと言いました。
- 37) おじさんはライオンが怖くないと言いました。
- 38) そして、おじさんはライオンのところに近づきました。

- 39) するとライオンがおじさんを食べようとしておじさんは速く走りました。
 40) するとおじさんはすごく高いところにいました。
 41) おばさんが、**おじいちゃん**のところにきました。
 42) するとおじさんはその高いところすごいを見せました。
 43) おばさんは降りてこいと言いました。
 44) するとおじさんは飛ぶように降りてきました。

の転移によるミスと、#31のような文法と語用論上のミスが現れている。他にも、動画の内容に反する表現（#24）と言ひ間違い（#29）、「おじさん」が「おじいさん」になる発音上のミスがある。日本語のナラティブでは、比較的ミスが少ないと言えるが、発話中に言葉を区切って言うまたは文間にポーズが入る傾向は続いている。

(15) J8 (9m 3w 1d)

「表11」で示されているように言葉を区切りながら発音する傾向は減少しているが、文間のポーズは4秒を超えるものも現れている。文中のポーズとは違って文間のポーズは、動画の流れに合わせて語るスピードを調整する場合もあるが、4秒を超えるポーズは、物語のフローからしても間の調整であるというより、言葉が間に合っていないためである可能性が高いと思われる。ここでは、誤用が明らかに少なくなっていて、同じミスでも自ら訂正する例（#11, #34）と気づかないもの（#33）がそれぞれ見られた。さらに#36は、統語上のミスというより発音のミスと考えられる。

(16) K8 (10m 1w)

学校の長期休みに入って10日ほどが経っていて、その間は、韓国語と日本語の使用が大幅に伸びることになった。特に学校の宿題があるわけでもないので、家の中で滞在する時間も増え、その間は、保護者との会話も1人遊びの際も、日本語と韓国語がメインになっている。しかし、韓国語のナラティブの結果からは、文中・文間のポーズと言葉の区切りが続き、特にナラティブの中盤以降で統語構文上のミスが続いている。

表 11 J8 (9m 3w 1d / 03:23)

- 1) 男の人が馬に追いかけてられて部屋の中に入ったならその部屋にはライオンが寝ていました。(+3s)
- 2) 男の人はゆっくりとドアの方に歩いて行きました。
- 3) そして男の人はドアを開けようとしたのですがドアが閉まってしまうました。
- 4) ライオンはまだ寝ていました。
- 5) 男の人は、助けを呼びました。(+2s)
- 6) そして男の人はゆっくりライオンに近づいて行きました。
- 7) そして後ろのドアから出て行こうと思いました。
- 8) だけど後ろのドアには虎がいました。
- 9) 男の人は早くドアを閉めました。
- 10) そしてゆっくりと立ち上がりました。
- 11) すると水が落とし、水を落としてしまいました。
- 12) ライオンは寝ていました。
- 13) すると、犬が吠えてきました。
- 14) 犬は大きい声で吠えました。
- 15) ライオンが起きると思っておじさんは犬に静かにしろと言いました。
- 16) しかし犬は、ずっと吠えました。
- 17) 怒ったおじさんは犬を蹴りました。
- 18) そしたらおばさんが来ました
- 19) 男の人はドアを開けてくれと言ったらおばさんは気絶しました。
- 20) 犬は逃げて行きました。(+2s)
- 21) 男の人はおばさんを起こそうとしました。
- 22) するとライオンが起きてしまいました。
- 23) するとおじさんはびっくりしてドアの方まで逃げて行きました。
- 24) するとライオンが起き上がっておじさんのところまで行きました。
- 25) しかしそのまま帰ってきました。(+4s)
- 26) するとおじさんは自分の体を触りました。
- 27) 生きていました。(+2s)
- 28) ライオンは怖く見えませんでした。(+4s)
- 29) するとおばさんが起きました。
- 30) そしておばさんはおじさんが生きてるのを見ました。
- 31) そして早く部屋のドアを開けました。
- 32) 早く出て来いと言いました。
- 33) おじさんは虎が怖くないと言いました。
- 34) そしておじさんはおばさんに待ってって言って、虎の、あれ、ライオンのところまで行きました。
- 35) するとライオンがおじさんを食べようとしたらおじさんはすごく速く走って行きました。
- 36) おばさんはおじさんがいるところまではいって行きました。

- 37) おじさんは高いところに登っていました。
 38) おばさんは降りて来いと言いました。(+2s)
 39) するとおじさんはその上ですごいのをしました。(+2s)
 40) 早く降りて来いと言いました。
 41) おじさんは飛ぶように降りてきた。
 42) おしまい。

語彙面では「男のおじさん」の他に「男の子」が使われることもあったが、すぐに「おじさん」に変えられている。そして、幼児語の使用と、その表現も幼稚な言い方になっている（例えば、#13, #14）。#1では、K4/K6/K7に続いて統語上の誤用が現れている。#2, #24, #35, #46, #47, #49においても、日本語の転移を含む統語構文上の誤用が見られている。

(17) J9 (10m 3w)

この時は、学校の長期休みが1ヶ月ほど経ち、1日4～5時間の課外活動²⁴⁾が始まって2週間が経過していた。前回のJ8の時と比べると、家庭内で保護者と過ごす時間が増えたため、韓国語と日本語の使用機会が休みに入る前に比べると一定水準増加され、維持されていたと見られる。この頃の観察ノートでは、日本語と韓国語で書かれたお描きやストーリーの中に、語彙や統語構文上の誤用が多く、言葉遣いの不自然さが多数現れ、さらに英語・韓国語・日本語がミックスされた例も現れている。しかし、J9のタスクで見られる誤用は、語彙選択のミス（#17-18の「男の子」）や混同（#36-38, #45-46の「おばさん」と「おじさん」の入れ替え）によるものが大半で、中にはミスへの気づきも見られる。その他、統語構文上の誤用は、発音のミスと思われる例（#2, #20）や以前から続く韓国語の転移に起因すると思われるもの（#8）がある。

24) 教科学習は行われず、年齢別に子どもをグループに分け、スポーツ中心のアクティビティがメインに行われる。参加する子どもの中にはCと同じ学校の顔なじみの子どもも多い。

表 12 J9 (10m 3w / 03:21)

- 1) おじさんが馬に追いかけられました。
- 2) おじさんはカゴの中にあるとそこにはなんとライオンが眠っていたということでした。
- 3) おじさんはゆっくりドアの方に行きましたとき。
- 4) そしておじさんは、ドアを開けようとしたのですが、ドアが閉まってしまったとき。
(+3s)
- 5) ライオンはまだ寝ていた。
- 6) おじさんは助けてくれと言った。(+3s)
- 7) そしておじさんがゆっくり歩きました。
- 8) そして後ろにいるドアから出て行こうと思ったが、そこには虎がいたということだ。
- 9) おじさんはすぐにドアを開めた。
- 10) おじさんはゆっくり...上がった。
- 11) そしてらミスで、水をこぼしてしまった。
- 12) ライオンはまだ寝ていた。(+2s)
- 13) すると犬が来た。
- 14) 犬が吠えていた。
- 15) うるさかった。
- 16) こままじゃライオンが起きてしまうと思った。
- 17) 男の子は犬に静かにしろと言ったが、犬は言うことを聞かなかった。
- 18) だから、男の子が、犬を足で蹴った。(独り言をささやくが聞き取れない)
- 19) するとおばさんが来た。
- 20) 男の人はドアをあげてくれと言った。
- 21) おばさんは気絶した。
- 22) 犬は逃げた。
- 23) おじさんは、落ちた水で、おばさんを、起こそうとした。
- 24) するとライオンが起きてしまったということだ。
- 25) おじさんは、ライオンが起きたのに気づいて(笑)すぐに...
- 26) そしておじさんはドアを開けようとした。
- 27) ライオンが立ったおじさんのところに行った。
- 28) しかしライオンはおじさんを食べなかった。
- 29) また元の場所に戻った。(+3s)
- 30) おじさんはまだ自分が生きていることに気づいた。(+3s)
- 31) すると、ライオンが怖く見えなかった。
- 32) おじさんは良かったと思った。(+3s)
- 33) すると気絶したおばさんが起きた。(+2s)
- 34) おばさんは、おじさんが生きているのを見てドアを開けた。
- 35) おばさんが早く出て来いと言った。
- 36) おばさんは怖くないと言った。
- 37) おじさんは早く出て来いと言った。

- 38) おばさんは怖くないと言った。あれ? (笑)
- 39) おじさんはライオンに近づいた。
- 40) ライオンがおじさんを食べようとした。
- 41) そこからおじさんは早く逃げて行った。
- 42) それをおばさんが付いて行った。
- 43) おじさんは高いところまで登っていた。
- 44) おじさんは途中で道に??った。
- 45) おじさんは来いと言った。
- 46) おばさんは来ないと言った。
- 47) おじさんはその上ですごいを見せた。(1人で眩き)
- 48) おばさんは降りて来いと言った。
- 49) おじさんは飛ぶように降りてきた。
- 50) おしまい。

(18) K9 (11m 1d)

長期休みの課外活動が1ヶ月近く続いているが、平日の4～5時間を除くと残る時間の殆どは韓国語と日本語が使用されていることになる。その影響があってからなのか、それまで継続して見られていた「男のおじさん」といった言葉の誤用がなくなっていて、「おじさん」と「おばさん」の混同の例(#23)だけが確認された。発音のミスでは、自己修正があるもの(#12)とないもの(#23)がある。統語構文上のミスの中には、特定の誤用が続いている例(#1)もあれば、日本語の転移と見られるもの(#45)のほか、言葉がうまく続かないことからくる表現上の不自然さが残る例(#12, #15)が現れているが、誤用の数からすると前回に比べて確実に減少していると言える。

(19) J10 (11m 3w 1d)

K9とJ10の間には、韓国からの親戚とともに約2週間近く家族旅行に出かけていて、その間は、韓国語が主に使われている²⁹⁾旅行から帰ってすぐに学校が始まっているが、前回のJ9に比べると、日本語の使用機会は激減していたことが考えられる。代わりに韓国語の使用が増加した影響とも見られる、誤用の転移の例(#1「男の人が馬に追いかけます。」)が現れた。それまで韓国語

の方では、継続して同様の誤用（K4, K6-K9）が見られていたが、日本語では初めてである²⁵⁾。その他にも、韓国語が日本語の発話の中にフィラーとして挿入される例（#30, #49）も現れた。言葉がスムーズに繋がらず区切るような言い方があったり、韓国語のフィラーの挿入と文中のポーズ、さらに文末の2秒を超えるポーズが入ったりすることで、物語全体においても流暢さが劣る傾向が示された。

#7では、発音のミスが見られたが、すぐに訂正が行われた。#48では「おじさん」を「おじいさん」と発音するミスがあったが、続く#49では同じ言葉のミスの後、自ら気づき、正しく言い直されている。#30から#37にかけては、「ライオン」が「虎」と言い間違えられている。その他、#39では言葉の誤用（「素早く」→「早く」）が考えられる。統語構文上のミスとしては、上記の#1のほかに、#23と#36が挙げられるが、#36は韓国語の助詞の使い方が転移された可能性がある。

20) K10 (12m 1w)

新学期が始まり、Cの通っていた現地学校での進学で4年生のクラスに配属となって2週間が過ぎた頃に本タスクが行われた。学校が始まるのと同時に再び英語のインプットが急速に増えていった。学校が始まる直前までの家族旅行の期間中は韓国語がメインで使われたほか、その前後も家庭での韓国語の使用は続いていたので、韓国語における誤用の程度も軽減され、発生頻度も減少の傾向を示すことが予想された。しかし、本タスクが実施されるまでの約2週間、新学期の始まりとともに英語の使用が増えてきた影響の方が大きかったようで、2ヶ月ほど前の結果と比べると一段と誤用の数は少なくなっていると

25) 韓国から訪れた親戚は日本語が分からないため、Cと保護者①、親戚の2人が一緒に行動をした間は、常に韓国語が用いられていたことになる。反対に、渡米以降、日本語の使用機会が全くない期間に相当する。

26) J10に続く韓国語の最後のナラティブ(K10)でも同様の誤用が観察されている。しかし、次のJ11までに韓国語の使用機会は日本語と変わらない程度までに戻ったため、韓国語における誤用が日本語に転移されるような例は、見られなくなった。

表 13 J10 (11m 3w 1d / 03:22)

- 1) 男の人が馬に追いかけます。
- 2) どっかに入りました。
- 3) ライオンがいました。
- 4) 眠っています
- 5) 男の人は、ドアの方に行きました。
- 6) そして、ドアを開けようと思いました。
- 7) でもノア、ドアは閉まってしまいました。(+3s)
- 8) ライオンは寝てます。
- 9) 男の人は、助けを呼びます。(+4s)
- 10) 男の人が、後ろの方に歩いていきます。
- 11) 後ろのドアの...扉を開けます。
- 12) 虎がいます。
- 13) すぐにドアを閉めます。
- 14) そしてゆっくりと、起きようと思いました。
- 15) そしたら、水をこぼしてしまいました。
- 16) ライオンは、(coughing) 寝てます。(+2s)
- 17) すると犬がきました。
- 18) 吠えました。
- 19) ライオンが起きると思いました。
- 20) 静かにしろとおじさんは言いました。
- 21) 犬はずっと吠えました。
- 22) おじさんが頼みました。
- 23) 犬は、け、きました。
- 24) おじさんは、犬を蹴りました。
- 25) するとおばさんがやって来ました。
- 26) ドアを開けてくれと言いました。
- 27) おばさんは気絶します。
- 28) 犬が逃げました。
- 29) おじさんが、水で、おばさんを起こそうと思いました。
- 30) 虎が、アヒ...ライオンが起きました。
- 31) おじさんはすぐにドアがある方に逃げました。
- 32) 虎が起きました。
- 33) 虎が立ち上がりました。
- 34) おじさんの方に行きました。(+2s)
- 35) そしてまた、元の場所に戻ってきました。(+2s)
- 36) おじさんが自分の体を触って、生きてるのを分かりました。
- 37) 虎は、怖く見えません。(+4s)
- 38) するとおばさんが起きました。

- 39) おばさんは早くおじさんが生きてるのを見ました。
 40) そして早くドアを開けました。
 41) 早く出て来いと言いました。
 42) おじさんはライオンが怖くないと言いました。
 43) おばさんは早く来いと言いました。
 44) おじさんがライオンの方に行きました。
 45) そしてライオンに近づくとライオンがおじさんを食べようとしてきました。
 46) おじさんはとても早く飛んで行きました。
 47) それをおばさんが追いつけて行きました。
 48) おばさんは、高いところに登ってるおじいさんを見ました。(+4s)
 49) おじいさんは、아니, おじさんは, その上ですごいの見せました。
 50) おばさんは来いと言いました。
 51) おじさんは飛ぶように降りてきました。

言えるが、1ヶ月前のK9に比べると喪失の傾向はやや進んでいるとも考えられる。

前回のK9より「男のおじさん」の誤用は現れなくなっていたが、#12のような「虎」と「ライオン」の言い間違いは見られている。また、#18の「鳴きました」という韓国語の言葉の前に、日本語の「鳴く」を連想できるような音韻「ナル」が見られる。つまり、日本語の音韻の転移が現れたが、自己修正により、言葉の発話の途中に、韓国語に変えられたと考えられる。

滞在期間が1年を超える頃まで、#1のパターンは韓国語のナラティブに続けて観察される統語上の誤用の例である。「馬に」の後に続く受身形の表現が上手く生成できず、「おじさんが(馬に)○○した」という能動態の形が、少しずつ言い方は変わっているが、K4とK6~K9までに続けて見られている。このパターンの誤用は、まず「転移」による性質の誤用ではないことと、他の文法上の誤用には見られない継続性が明確であることから、別の観点でその要因を探るべきであると考えられる。

その他、#37及び#45では統語構文上の誤用が、#46及び#49では同一の単語を繰り返すといった誇張な表現も見られている。そのような言葉の繰り返しは、文中及び文間のポーズの挿入と同じく、発話の自然さを損なうイメージ

表 14 J11 (12m 2w 6d / 03:20)

- 1) おじさんが馬に追いかけてられて、どこのケージの中に入りました。
- 2) そのケージはライオンがいました。
- 3) ライオンが寝ているケージでした。
- 4) おじさんは音を立てずに歩いていて、...ドアを開けようとして、...ドアが閉まって、ライオンは寝ていて、...おじさんは助けを呼んで、.....また音を立てずに歩いて、...裏のドアから出て行こうとしたら、虎が出てきました。
- 5) おじさんはドアを閉めました。
- 6) ゆっくりゆう起きて水をこぼしました。
- 7) ライオンは寝ています。(+3s)
- 8) すると犬がきました。
- 9) 犬が吠え...て、うるさくしました。
- 10) ライオンが起きそうでした。
- 11) おじさんは耳を塞ぎました。
- 12) お願いしました。
- 13) けれども犬はもうずっと吠え始めました。
- 14) そして唸りました。
- 15) おじさんは、ライオンが起きそうで、犬の足を蹴りました。
- 16) また蹴りました。
- 17) おばさんがきました。
- 18) おじさんはドアを開けろと言いました。
- 19) おばさんは気絶しました。
- 20) 犬は逃げました。
- 21) おじさんは...水でおばさんをおこそえようと思いました。
- 22) するとライオンが起きてしまいました。(+2s)
- 23) おじさんは早く(笑)逃げました。
- 24) そして、ライオンが、立ち上がって、おじさんのところに行きました。
- 25) おじさんは、動きませんでした。
- 26) ライオンは何もせずに元の場所へ戻りました。(+3s)
- 27) おじさんは自分の体を触りました。
- 28) 良かったと思いました。
- 29) ライオンが顔を...怖くはありませんでした。
- 30) おじさんは、...ため息をつきました。
- 31) するとき、おばさんがまた意識をもど...しました。
- 32) おばさんは生きてるおじさんを見てびっくりしました。
- 33) 早くドアを開けました。
- 34) 出て来いと言いました。
- 35) おじさんはライオンが怖くないと言いました。(+2s)
- 36) おじさんはライオンに行ってみると言いました。

- 37) おじさんがライオンの近くにいとライオンがおじさんを**食べよう**にしました。
 38) おじさんはとても早く逃げ出しました。
 39) おばさんは**それ**について行きました。
 40) 速く走って行きました。
 41) すると、おじさんは、高い所にいました。(+2s)
 42) おじさんはその上に、すごいのを見せました。(+2s)
 43) おばさんは降りて来いと言いました。
 44) おじさんは飛ぶように降りてきました。
 45) 終わり。

として作用すると言える。

(2) J11 (12m 2w 6d)

渡米から1年と3週目に当たる日に最後のナラティブが行われた。前回のJ10からJ11までにかけては、新学期が始まって約1ヶ月が経過している。夏休みの終わりに行われたJ10と、1ヶ月間英語のインプットを浴び続けたJ11の結果は、たった1ヶ月の時間差ではあるが日本語と韓国語そして英語のそれぞれにおける使用頻度の変化から考えると、少なからず意味を持つ。まずは、#6の「ゆっくりゆう(ゆっくり)」、#21の「おこそえようと(起こそうと)」、#31の「するとき(そのとき)」といった発音のミスが確認できる。そして、#1、#13、#29、#37、#39、#42のような統語構文上のミスも見られている。

語中のポーズ(#9、#31)を始め、文中のポーズ(#4、#21、#29、#30)及び#24のように意味の単位で言葉を区切るような発話スタイルは、上で述べた誤用に加えて、いかにも言葉がスムーズに繋がらず、思うように話が上手く進まない様子を窺わせる。

4-2. 考察

前項までの分析結果をもとに、以下ではまず、L3使用環境において滞在時間の経過に伴う韓国語と日本語への接触・使用量の減少と喪失の過程との関係

について、Cの滞在期間中にまとめられた観察ノート（フィールドノート）の記述を参考に考察を行う。その後、喪失の過程で観察された両語の言語面での変化、つまり、どのような言語要素が如何に喪失の傾向を示したかをまとめて考察したい。

4-2-1. 時間の経過に伴う喪失の進行傾向

まず、時間の経過に伴う喪失の過程は、L3習得が進む一連の過程とも深く関わっている。L3の使用環境に移り住むまで、Cには英語の学習経験が一切なく、渡米して数日後から通い始めた現地の学校についていくために、英語のアルファベットを読んで書く練習から始めている。内気で大変シャイな性格のCではあるが、現地の学校生活に慣れるため、積極的に英語の学習に取り組んでいた。その結果、渡米から3ヶ月が経過した頃には1人でも英語の絵本が音読できるようになるまで学習が進んでいた。その間、韓国語と日本語の使用は、家庭内で主に両語が話せる保護者とのやりとりに限られていた。補足すると、渡米後1ヶ月が経った頃からは、学校の正規の授業が終わってからも校内にしながら他の同級生達と一緒に過ごす放課後の授業も続いていたため、渡米から最初の3ヶ月は日々英語のシャワーを浴びるような環境が続いていたと言える。その反面、渡米前と比べて圧倒的に少ない韓国語または日本語のインプットとアウトプットを経験するようになっていたことになる。

滞在39日目の観察ノートによると、同じ学校に通う日系アメリカ人で、ある程度の日本語が分かる2歳年下の女の子とCの部屋で遊んでいた時、Cがいきなり「日本語でしゃべるのが大変！」と独り言のように韓国語で話していたという。そして、滞在55日目、朝の通学中にCと同じクラスの女の子からCが以前よりも英語が理解できるようになったと話しかけられる。また、滞在3ヶ月前後には、Cが1人で英語をしゃべりながら遊ぶ姿が観察されている。さらに、この時期すでに簡単な日本語の単語が思い出せなくなっていたり、韓国語で音読した際は、発音のミスが見られるようになっていたりすることが確認できる。

最初の日本語のナラティブ(J1)は渡米から85日目に行われたが、すでにこの時のCの発話には日本語の不自然さが現れるようになっていた。タスクの後、Cに録音したナラティブを聞かせると、具体的にどの部分がおかしいなどと言いながら、自分の日本語をモニタリングしていた。そこで「日本語と韓国語のうちどちらの方がより楽に話せるのか」と尋ねると「両方ともよく分からない」という答えが返ってきた。さらにCは「今は英語を勉強しているので、漢字も全部忘れてしまったし、韓国語の綴りの「에」と「애」も忘れちゃった。けど、また勉強すれば分かると思う。」と言っていた。以上のCの自己モニタリングやJ1の結果からも分かるように、この時すでに日本語で物語を話そうとしても（そのやり方も展開内容もすでに分かっているにもかかわらず）Cが思うほど簡単に言葉が上手く口から発せられなかったり、思いとは違う言葉が出てきてしまったりするといった母語喪失の初期の傾向が観察されていると言える。

滞在期間が4ヶ月になる頃は、日本語の音読のスピードに低下が見られ、一人芝居の遊びの途中、言葉がうまく続かなくなって止めてしまうことが観察されている。この時期、韓国語の作文でもスペルミスが多くなってきた。さらに、1人で遊びながら落書きや文章を書くときは、英語と日本語、韓国語が混ざることが現れ始めた。この時期のナラティブの結果(K2-J2-K3-J3)でも喪失が進んでいる様子が確認できる。また、その程度は、日本語より韓国語の方が進行しているようにも見受けられる。滞在3ヶ月から4ヶ月にかけての観察ノートでは、1人遊びの時や、保護者との会話の際にCが先に持ち出す言語は決まって日本語になっていたことが分かる。Cにとって日本語の方が韓国語よりも話しやすい言語であった可能性が考えられる。しかしその一方で、書き言葉になると、相当漢字を忘れていたこともあって、日本語よりは韓国語を好んで書くようになっていたと思われる。

滞在期間が4ヶ月を過ぎた頃に、韓国から保護者②と3歳年上の従姉がアメリカに来て2ヶ月近く同居することになった。2人がCのところに来てから

は、家での使用言語はほぼ韓国語に変わり、最初の1週間は殆ど日本語が使われなくなっていた。しかし、その1週間後、Cが日本語で一人芝居をしていることが目撃されている。その後しばらくの間、家族の間では韓国語が話されていたが、Cが1人で何かをする時は日本語が使われていた。そのような状況が20日ほど続いた後、今度は、年度末の休みで、日本から知人が訪れてきて共に行動をしていたため、その数日間は日本語の使用が急激に増える時期となった。このように、韓国語と日本語のインプット・アウトプットの程度が数日の間でも急激に変化することがあった。そのことを踏まえると、この期間中に行われたK4とJ4の発話にも、何らかの変化が現れることが予想される。データ分析の結果からは、韓国語、日本語ともに発話の自然さと流暢さの面では共通して喪失の影響が見受けられるが、その程度は韓国語でより明らかである。発話のあらゆる言語要素（語彙・文法・表現・発音）において前回よりも喪失が進んでいる様子をはっきりと表れている韓国語とは相対的に、日本語の方は、特に韓国語の転移と思われる表現や幼児語の使用、英語の日本語化した発音などが印象的である。

滞在が5ヶ月を過ぎた頃には、現地学校の3年次向けの本を1人で読むようになっていたり、読んだ後はその本の内容をまとめて英作文をしたり、クラスの担任の真似をしながら英語で一人芝居をして遊ぶ姿も見られている。そして滞在6ヶ月目を過ぎた頃には、この頃のCの書いた落書きのような英作文に、英語がすらすら話せないので自分が誰であるかを人に伝えることができないが、書き表すことはできる、という記述がある。またこの時期に英作文の回数が増えていて、話し言葉は日本語でも書き言葉になると英語で書いたものを見せられることが多くなっていた。これは、同時期に実施された英語学習者向けの州共通の習熟度テストの結果²⁷⁾とも通じる話で、スピーキングを除く他の領域ではかなりのスピードでCの英語の習得が進んでいることが分かる。一方、

27) 詳しくは、本稿の第2章を参照されたい。

韓国語と日本語の発話では、Cが渡米するまでにはあまり観察することのなかった文中のコードスイッチングが見られるようになった。また、この時期のナラティブ(K5, J5)にも見られる(「サジャ(ライオン)」と「サグァ(りんご)」, 「ライオン」と「トラ」の言い間違い)ように、各言語内で言葉の混同が進んでいる様子が伝わる。なお、両語ともに語彙以外の言語要素でも喪失の影響は一層その程度を増していることがデータ分析の結果からも明らかになっている。しかし、同時に日本語と韓国語の喪失の程度には質的な違いも感じられるほど、韓国語の方でより喪失の傾向が進んでいることもこの時期の特徴と言える。

滞在期間が7ヶ月を過ぎた頃は、近所に住む同じクラスの女の子と一緒に遊んだり、放課後の自由遊びの時間に同級生の女の子達と話を交わしたりすることが増えてきた。またこの時期にCは満10歳になっていて、現地の学校や生活にも慣れてきたこともあってか、言葉と行動においても以前に比べると少し積極的になってきたと感じられた。家では2人の保護者と韓国語と日本語で話をしてきたが、Cが1人になる時は英語で独り言を言ったり、日本語で芝居をしたりしていた。K6のナラティブの直後には、学校が1週間の休みに入り、その間韓国から訪れてきた叔母と過ごす時間が多く、その分韓国語の使用が増えるようになっていた。そして、以降のJ6のナラティブでは、一層韓国語の転移の影響が現れるような結果となったが、喪失そのものの進行ぶりは、K6も含め、前回のタスクに比べるとやや減少している様子である。またその原因としては、学校の休み期間中は英語の使用機会がかなり減っていて、その分韓国語が増加し、日本語もある程度使用機会が増えていたと考えられる。

渡米から8ヶ月を過ぎた頃には、韓国語の朗読で言葉が口の中でこもるような発音が観察された。特に保護者②との会話を除けばCが自ら進んで韓国語を話すことは少なくなっていた。代わりに、一人芝居の時は日本語が先に使用されるが、いつの間にか途中で韓国語と英語が混ざるようなストーリー展開に変わっていた。普段の生活でも韓国語の使用に不自然さが目立つようになって

いたが、K7のデータからも、物語全体を通して言葉のコントロールがうまく働かない様子が伝わる。そして、J7の数日前までに一時期日本語の使用機会が倍増することもあったが、ナラティブの結果からすると、むしろ前回のJ6に比べても喪失の程度は進んでいると考えられる。

滞在期間が9ヶ月を過ぎた頃、3年生の最後の日を迎え、学校生活にすっかり馴染んでいたCは、この学年が終わらずに続いて欲しいと言っていた。また、この頃になると、思春期の兆候として1人で行動をしたがるほか、自分の意思を強くはっきりと述べるようになっていた。独り言で英語をしゃべりながら、自分には英語を話す機会がないので、1人でモノローグをするしかないと呟いていた。

滞在10ヶ月目を迎える数日前までに、家の中では主に保護者②とは韓国語を話し、一人芝居の方でも徐々に韓国語の使用が増えていくことが観察されたが、10ヶ月目前後で行われたJ8とK8の結果は、反対の様子を示している。つまり、日本語の方では、1ヶ月前のJ7に比べると喪失の程度が減少し、発話中のミスにもすぐに気が付いて自己修正ができるようになっていた。しかし、10ヶ月を過ぎてから実施されたK8では、2ヶ月前のK7とあまり変わらない喪失の程度を示している。限られた期間ではあるが、家庭内では韓国語の方がより保持されやすい環境であったことは間違いない。しかし、それまでにCが継続して選好していたのは日本語であったことを勘案すると、インプット以上に自らのアウトプットの機会の方がこの年齢の子供の喪失の程度と質の差を決める要因である可能性も排除できない。

学校は長期の休みに入り、保護者②が先に帰国したことで、滞在11ヶ月になるまで、英語と日本語、韓国語への接触・使用量はほぼ同等のレベルに変わっていた。英語の方は、長期休み期間中の課外活動に参加したことで一定時間の接触が続いた。一方、韓国語と日本語は主に家庭内に限られてはいるが、学校があるときに比べると接触・使用機会も確実に増えている。その影響もあってか、11ヶ月前後に行われたJ9とK9の結果では、特に韓国語の方でそ

れまで繰り返し見られていた語彙のミスがなくなるなど、大幅に喪失の程度が軽減されていることが確認できる。前回と比べるとやはり学校が長期の休みに入ったことが一番の変化の要因ではないかと考えられる。

長期の休み期間中、約3週間は課外授業に参加していたが、以降の約2週間は韓国から来た従姉らと4人で旅行をすることになった。その期間中は、韓国語が主に使われていたことで、旅行の直後に行われたJ10では、初めて文中に韓国語が挿入される発話が見られた。その他にも、韓国語の発話の中に続いていた文法のミスがそのまま日本語の発話にも転移される現象まで現れている。日本語が極力抑えられ、韓国語がメインに使用される期間が集中的に続いていたことがこのような結果を生んでいると考えられる。

旅行から帰ってすぐに新学期が始まり、またそれから2週間が経った頃にK10が行われたが、この時は全体の滞在期間が1年を超えるようになっていた。J10同様、2週間の旅行中に韓国語の使用機会が大きく増えたことも、また新学期の始まりも複合的に作用して、喪失の傾向はK9に比べると程度を増しているが、それより2ヶ月前のK8と比べるとやはり停滞していると言える。

本稿における最後のナラティブは、新学期が始まってさらに1ヶ月が経過した時に実施された。この時のJ11の結果からは、長期の休み中のような日本語の使用はなく、また一時期日本語がほとんど使われない時間も続いていたことで、新学期が始まる前、つまり旅行直後のJ10の結果よりも日本語の発話における喪失の程度は一段進んでいることが分かった。

ここまでの一連の言語喪失の過程をまとめると、渡米から3ヶ月を境にして日本語と韓国語の両方で喪失の影響が確認され始め、以降は家庭内での両語の使用状況やC本人の言語選好によって両語における喪失の様態はその程度と質に変化がもたらされるようになっていたと言える。そしてそのような喪失の進み具合は、日々の生活で言語の使用状況が変わることで大きく左右されることになる。その結果、本稿においては、Cの通う学校の言葉であり生活環境に

における主流言語である英語への接触・使用機会の変動が、韓国語と日本語の喪失の程度を決める一番の変数であったと考える。

4-2-2. 喪失の過程で観察された韓国語と日本語の言語面での変化

ここでは、滞在期間の経過に合わせて韓国語と日本語で行われたナラティブのデータ分析を通じて明らかになった言語要素別の喪失の特徴をまとめたい。喪失を示す指標として発話された文単位の表現に現れる誤用に着目しているが、そのタイプは、発音のミス、語彙（選択）のミス、統語構文上（文法）のミス、表現上（語用論）のミス、負の転移の結果に分けることができる。しかし、1つの誤用の原因が必ずしも1つの要因によるとは限らず、複数の要因が関わることもある。つまり、発音・語彙面の誤用もあれば、語彙・文法面の誤用もあり、文法・語用論上の誤用もあると考え、その区分を1つの要因に限定しないこととする。

まず、滞在3ヶ月を境に、最も先に喪失の影響と見られる誤用が現れたのは語彙であった。韓国語では、「おじさん (아저씨)」を「男のおじさん (남자 아저씨)」と称する誤用がこの時期から現れ、滞在期間が10ヶ月に至るまで継続して見られている。「男のおじさん (남자 아저씨)」に類似したものとして「男の子 (남자 아이)」「男子の人 (남자 사람)」といった誤用も見られているが、もともとは日本語の「男の人」が転移した誤用である可能性も考えられる。その他では、「サジャ (ライオン)」を「サグァ (りんご)」、 「ムン (ドア)」を「ムル (水)」と間違える例²⁸⁾と、「ライオン」を「虎」に、「おじさん」と「おばさん」を混同する例²⁹⁾が複数回現れている。

28) 発音が似ていることから「音韻的妨害」が起きているものと考えられるため、一種の「マラプロピズム (malapropism)」現象によるものと言える (cf. 森島, 2015: 167)。

29) 語彙認識に関する「ロゴジェン・モデル」によると、「イヌ (犬)」という語を聞いてそれが持つ意味的なロゴジェンを共有する「猫」「犬小屋」などの関連する語彙や、「居ぬ」「射ぬ」といった語を持つ語彙も「犬」という語彙の認識と同時に活性化されるという (cf. 村杉, 2017: 19)。

一方、日本語では「おじさん」を「おじいさん」と言ったり、韓国語同様「おじさん」と「おばさん」、「ライオン」と「虎」を混同したりしている。他にも、「遠い-高い」「カゴ-箱」「早速-素早く」「男の人-男の子」が一時期誤用として現れることもあった。語彙の場合、同じ単語が繰り返し誤用として現れることが多い（例えば、「おじさん」や「おばさん」）が、C自らが間違いに気づき訂正する場合と、意識できず同じミスを繰り返す例が見られている。また、一度の物語で誤用と正しい単語が混在することも多い。無意識に、時には繰り返し発せられる言葉の間違い（発音のミスも含めて）が大半であるが、日本語の転移と思われる韓国語の誤用が、次は反対に日本語の発話に見られる「誤用の逆転移」の現象も確認できた。

本稿では、語彙のほか、統語構文においても「日本語→韓国語（誤用）→日本語（誤用）」といった誤用の転移が少なくとも一例現れているが、いずれも日本語より韓国語の使用機会がはるかに上回る時期に見られた誤用のパターンであることに注目したい。Cの場合、言葉の習得順序からすると韓国語が第1言語、日本語が第2言語になっているが、生後18ヶ月からの2言語接触と、一定の間隔で韓国と日本を行き来しながら両国の保育園と幼稚園、小学校の教育を受けていることから、その都度優勢言語が常に変わるといった経験を繰り返してきている。今回の調査が行われた英語使用環境に移る前の約5ヶ月間は日本で公立小学校に通っていたことから、やや日本語の方が優勢になった状態で英語の習得が始まった可能性はあると言える。しかし、渡米以降はその状況が一変して、日本語・韓国語ともに限られた接触・使用機会しか持たなかったことを勘案すると、果たしてどちらの言語が優勢であったかは簡単に判断できない。

韓国語と日本語の同時バイリンガルで、思春期以降英語を第3言語として習得するようになった1人の被験者の言語能力・言語運用と言語環境との関係を調べた森山（2007）では、言語間の誤用（転移）は思考言語と表出言語が異なる場合に起きやすく、思考言語から表出言語へ転移が起きやすい、としている。

る。また、思考や概念化などの際に用いられる内的な言語を「思考言語」と呼び、作文や発話の際に用いられる外的な言語を「表出言語」と定義づけている。さらに森山(2007)は、思考言語は置かれた言語環境の影響を受け、常に優勢言語と同じになるとは限らず、言語環境の影響が少ない場合には優勢言語になる、としている。バイリンガルはモノリンガルに比べ、安定した1つの優勢言語を持っていないため、置かれた言語環境の影響を受けて思考言語が変化しやすいというのが森山の主張であるが、少なくとも本稿のケースにおいて森山の考えを当てはめることはやや無理があるように考えられる。森山の被験者は、自ら自分の言語使用をモニタリングして、英語を話す前に韓国語がいったん頭の中に思い浮かぶことで自分の母語は韓国語で、韓国語で考えたことを英語に変えているのだという自覚を示している。しかし、本稿のCの場合は、そのような自覚も、「思考言語」と「表出言語」を分けることにもおそらく意識が及んでおらず、自分の言語選択についてもほぼ無意識的に、時には思いとは違う方向に、「思考」を意識しないうち言葉が発せられる(または思考が進んでしまう)可能性の方がより高いと考えられる。

続いて、本稿のナラティブのデータ分析では、転移による誤用の判断が不明な場合もあれば、文法面では正しいと思われる表現も文脈に沿わないものや、前後の意味のつながりが不自然になるような例も多数観察された。これについては、統語構文(文法)知識そのものの退化により喪失の傾向が見られるというよりも、処理過程における一種の過負荷状態での誤作動(処理不能)が生じていると考えられる。言い換えると、正しい文法知識に上手くアクセスできないことに発音を始め、語彙・文法・語用論上のミスがあると考えるということになる。これまでの一連の先行研究においても、統語構文における能力よりも語彙面において言語喪失の傾向が顕著であり、むしろ統語面では言語接触が途切れてからも相当の期間、その能力が維持されているとの報告がある³⁰⁾ 今回の分析結果においても、全体的には同様の見解を示すことができる。しかし、一部特定の文法上の誤用の形態は、母語習得の過程で言語形成期の後

期またはより高度な文法知識を要すると思われるものが現れていて、それらの特質を持った統語構文の場合、より喪失の傾向を示しやすい（喪失になりやすい）のではないかと考えられる。言い換えると、より基底にある言語能力（文法能力）は損なわれにくいのが、より複雑で有標性を示す形態統語構造においては、さらなる処理上の負荷が掛かるために、喪失の過程でも比較的早期から逸脱した形態として現れ、退化が進む可能性も完全には排除できない。本稿では、特に受身形や複文の構造において誤用のパターンが繰り返される傾向が示された。しかし、大半の文法・語用論上の誤用は、言語間の転移のほか、自己訂正も見られる一時的な文処理プロセスの困難によるものであると考えられる。

5. ま と め

生後18ヶ月頃から韓国語と日本語の使用環境下でバイリンガルとして育った女兒Cは、日本の公立小学校3年生だった満9歳5ヶ月の時、今度は英語が主流となる生活環境に移住することになった。移住から約1年が経過するまでの間、現地の学校に通いながら第3言語として英語を習得するようになった。この過程で、それまである程度均等に保っていた韓国語と日本語の言語能力にどのような言語喪失の傾向が現れたかを、縦断的研究手法を用いて調べた。

先行研究（金，2016）では、バイリンガル児童のL3習得と既存の2つの言語の語彙面における喪失に焦点を当ててデータの分析と考察を行っている。そこで本稿は、分析の対象を「ワード」から「センテンス」に広げ、語彙のほか、統語構文、発話の自然さまでを分析の対象にしている。データの収集方法として、音を消去した3分26秒の動画をCに見せ、映像の内容を物語として再現する「ナラティブ」タスクを用いた。一定の時間の間隔において、同映像のナ

30) cf. Flores (2015).

ラティブで得られた韓国語と日本語の発話データをそれぞれ書き起こし、その内容をもとに、滞在期間の経過とともに、個別単語の発音から言葉選択の適切性、文法、そして語用論に至るまで、喪失の過程と傾向を分析し、考察を行った。

その結果、英語が主流言語として使われている生活環境に移ってから約3ヶ月を境にして、韓国語と日本語のナラティブのデータに喪失の傾向が確認された。最初に喪失が感知されたのは語彙の方で、発音のミスを始め、発音の類似する言葉への言い間違い、意味概念の関連性の高い言葉間の混同、韓国語と日本語の相互転移による誤用が見られている。続く文法と語用論の面では、韓国語と日本語の両方で相互転移の影響と見られる誤用と、言語別に特徴付けられる誤用が確認できた。そして、言語間の転移による誤用の中には、韓国語から日本語、日本語から韓国語といったパターンの転移がほとんどではあったが、一旦転移による誤用が一方の言語で現れた後、その誤用が再び他方の言語に転移される「誤用の逆転移」とも言える例も観察された。それについては、複数の言語が共存するマルチリンガルの場合、日々複数の言語間の接触・使用頻度が変わることが想定できるため、一定期間を超える言語間の使用頻度のバランスの変化が原因の1つであると考えられる。しかし、これは今回の事例研究で分かった一例なので、さらなる事例の検討が求められる。

言語間の転移に起因しない文法と語用論上の誤用は、反復性が見られるものと一時的なものに分けることができる。ここでも、特定の文法項目において誤用が繰り返されるということは、喪失の傾向が表れやすい性質のものであり、継続の結果、完全喪失に至る可能性が高いものでもであると、慎重に予想することができる。今回のデータでは、反復性が見られる誤用よりは単発的・偶発的とも言えるべき統語構文上のミスがより多かった。その中身の分析の際も、Cの言語能力としての「文法知識」そのものが何らかの影響を受けた結果であるというよりは、むしろ「言語生成」の段階で、話者のその時の健康状態をはじめとする様々な認知的・情緒的要因などが複雑に絡んだ、言語処理シス

テムの不具合によるものであると考えられる。言い換えると、文処理の過程で複数の言語が混在している（または活性化されている）マルチリンガルの場合、言語処理の過負荷による制御不能や困難による結果であるという考えである。

第3言語の習得が進む中で、1年を超える滞在期間中の時間の経過とともに韓国語と日本語ではどの程度の喪失が現れたかについても考察を行った。その結果、韓国語と日本語の喪失の程度と質の変化は、英語への接触・使用機会の増減と直接関わっていることが分かった。本稿においては、第3言語の発達状況が明示的に観察できた滞在3ヶ月を境に、韓国語と日本語の方で喪失の傾向が確認されている。以降は、Cの渡米前の優勢言語、渡米期間中の家の中での言語使用の状況によって両語の喪失の進み具合には違いが生じている。両語ともに言語喪失の傾向が示されたが、その程度は韓国語の方でより強く現れている。

その理由としては、上述の通り、渡米前の優勢言語（より接触・使用機会が多い言語）が日本語であったことで、渡米後も日本語がCの選好言語になっていた可能性がまず考えられる。そして、渡米後も近所付き合い等である程度一定して日本語話者との接触があったことが、接触する機会と量にばらつきがあった韓国語の結果との違いをもたらしたとも考えられる。しかし、その傾向も、滞在11ヶ月頃には変化が見られた。約2週間に及んで居住先を離れ、韓国から訪れた親戚と一緒に旅行に出かけた間は、日本語との接触がゼロに近い状態に変わっていた。その結果、旅行から帰った後に行われた日本語のインタビューでは、それまでの傾向よりも一層進んだ喪失の特質が観察されたほか、日本語の発話の中に韓国語が挿入される例や、日本語からの転移で誤用として感知された韓国語が逆に日本語の発話中に誤用として現れる「誤用の逆転移」のような現象まで見られている。

以上のことから、思春期前のバイリンガル児童の第3言語習得には音韻認識とメタ認知の面で有利に働く能力がある反面、既存の2つの言語への接触・使

用機会の減少により、言語生成のあらゆる面において喪失の傾向が現れることが分かった。そして喪失の進行傾向は新しい言語能力の発達の程度に大きく左右されるものと考えられる。また、本事例研究の被験者の場合、通常のモノリンガルの子どもが辿り着くような母語の閾レベル (threshold level)³¹⁾ に達するのは異なる言語形成及び習得過程を経てきたことで、バイリンガル児童の年齢要因だけをもって、調査・観察の期間中に韓国語と日本語それぞれの閾レベルを判断するのは大変困難であることが分かった。さらに、今回の事例研究は、第3言語使用環境への移住から約1年が経過するまでの喪失の過程と傾向を調べていたため、滞在年数が増していくにつれ、1年ではある程度維持されていた韓国語と日本語の文法能力も、誤用の反復と強化によって退化に至る喪失の過程に進む可能性を完全に排除できないことが示唆された。

モノリンガル児童の第2言語習得過程に見られる母語の統語構文上の言語能力の変化(喪失)と、バイリンガル児童の第3言語習得の過程で見られる既存の2つの言語能力の変化は、どのような類似または相違点があるのか。これら2つの被験者群を調査・比較することでその点を探ることが可能になると考える。これについては、稿を改めて考察できればと思う。

参 考 文 献

- 金菊熙 (2016) 「子どものバイリンガリズム－第3言語習得環境でのPNTの結果分析を中心に－」『松山大学論集』第28巻第5号, 243-281.
- 金菊熙 (2018) 「幼年期の第2言語習得による母語喪失－日本語を母語とする2人の子どもに対する縦断的事例研究の結果を中心に－」『松山大学論集』第30巻第1号, 155-227.
- 中島和子 (2010) 『マルチリンガル教育への招待』ひつじ書房
- 村杉恵子 (2017) 『ことばとこころ－入門心理言語学』テコム
- 森島泰則 (2015) 『なぜ外国語を身につけるのは難しいのか－「バイリンガルを科学する」言語心理学』勁草書房
- 森山新 (2007) 「韓日英トライリンガル生徒の言語能力・言語運用と言語環境との関係」『日

31) cf. Baker, C. (2011: 149-150).

- 本學報』70 (韓国日本学会), 25-41.
- 山本雅代・井狩幸男・田浦秀幸・難波和彦 (2014) 『バイリンガリズム入門』大修館書店
- Baker, C. (2011). *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. Clevedon: Multilingual Matters (5th Ed).
- De Bot, K. & Stoessel, S (2000). In Search of Yesterday's Words: Reactivating a Long-Forgotten Language. *Applied Linguistics* 21 (3), 364-388.
- Flores, C. (2015). Losing a language in childhood: a longitudinal case study on language attrition. *Journal of Child Language* 42, 562-590.
- Genesee, Fred (2001). Bilingual First Language Acquisition: Exploring the limits of the language faculty. *Annual Review of Applied Linguistics* 21, 153-168.
- Hirai Seiko (2002). Longitudinal L2 Attrition: A Case Study of a Japanese-English Bilingual Child. *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism* 8, 26-57.
- Slobin, D. I., Dasinger, L., Küntay, A., & Toupin, C. (1993). Native Language Reacquisition in Early Childhood. In E. V. Clark (Ed.), *The Proceedings of the Twenty-Fourth Annual Child Language Research Forum* (pp.179-196). Stanford, CA: Center for the Study of Language and Information.
- Snodgrass, J. G. & Vanderwart, M. (1980). A Standardized Set of 260 Pictures: Norms for Name Agreement, Image Agreement, Familiarity, and Visual Complexity. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory* 6 (2), 174-215.
- Tomiyama, M. (2000). Child Second Language Attrition: A Longitudinal Case Study. *Applied Linguistics* 21 (3), 304-332.
- Xavier Aparicio and Jean-Marc Lavour (2013). Recognising words in three languages: effects of language dominance and language switching. *International Journal of Multilingualism*, 1-18.

*以下、本稿の調査に用いられたインターネットサイト

The Lion's Cage (<https://www.youtube.com/watch?v=79i84xYelZI>)

Philadelphia Naming Test (mrii.org/Philadelphia-naming-test/)

付録 「韓国語ナラティブの書き起こし (K1~K10)」

K1 (滞在期間 - 1m 3w 2d / 発話時間 - 03:10)

- 1) **Ummm...**, 사자가… 자고 있습니다. (+4s)
- 2) 나갈 수가 없네요.
- 3) 이런. 문이 잠겼습니다. … **Oh, No!** (+3s)
- 4) **Umm.** 그래서 이제 누군가를 부릅니다.
- 5) 누군가를 불러요.
- 6) 그런데… 잠금잠금 또 다른 입구에 들어갑니다.
- 7) 그런데 거기서! (+3s)
- 8) 사자가 또 자고 있네요.
- 9) 조심조심 일어납니다.
- 10) 우와…, 이런 큰일 났네요.
- 11) **사자가 일어나고 싶습니다.** (+3s)
- 12) 갑자기 개가 오네요. (+3s)
- 13) 당황하네요.
- 14) 조용히 하라고 말하는 것 같은데…개가 말을 안 듣네요.
- 15) 저리 가라지만, 개는 가지 않았어요.
- 16) 사자가 일어나게 생겼어요.
- 17) 발로 차네요. (laughing)
- 18) 갑자기 주인이 왔어요.
- 19) 조용히 하라네요. (+2s)
- 20) 하지만 뭐라는 지는 모르겠어요.
- 21) 어! (여자가) 기절해 버렸네요.
- 22) 이제 어떻게죠?
- 23) 사자가 깨어날 것 같아요.
- 24) 조심조심하는데 물을…
- 25) 이런, 사자가 깨어났어요~! (+2s)
- 26) 큰일 났어요!
- 27) 사자가 깨어나 버렸어요. (+3s)
- 28) 사자가… 살려 주세요. (+2s)
- 29) 다행히 사자는 그냥 가네요. (+3s)
- 30) (남자는) 안심이 됐나 보네요. (+4s)
- 31) 별로 무섭지 않게 생긴 사자입니다. (+3s)
- 32) **그러자 기다리던 사람이, 사, 살아났네요.** (+2s)
- 33) (남자가) 별거 없다고 말하는 거 같은데요. (+2s)
- 34) 하지만은 (여자가) 빨리 문을 열어 줬어요.
- 35) (남자는) 사자는 괜찮다고 하네요.
- 36) 믿을 수가 없다면 제가 보여 주겠다고, 말하는 것 같은데요. (+3s)
- 37) 하지만 사자는 결국 말을 듣지 않고… (+2s)
- 38) 이런… (남자가) 벌써 올라갔어요. (+2s)
- 39) 괜찮다고 말하네요. (+4s)
- 40) **Wow ~!** (laughing) (남자가) 멀쩡하다고 말하네요.
- 41) (여자가) 내려오라고 했어요.
- 42) (laughing) 완벽하네요.

K2 (3m 3d / 03:23)

- 1) 아저씨가 말에게 쫓겨서 어느 창고 안으로 들어갔습니다.
- 2) 그 창고 안에는 사자가 있었습니다.
- 3) 사자는 다행이 자고 있었습니다.
- 4) 그래서 **남자 아저씨**가 ... 밖으로 나가려고 했습니다.
- 5) 밖으로 나가려고 했는데, 그.. 문이 잠기고 말았습니다. (+2s)
- 6) 그래서 **남자 아저씨**는 ... 그, 좀 도와달라고 요청을 했습니다.
- 7) 그러곤 ... **남자 아저씨**는, 살금살금 ... 그.. 걸어갔는데, 어느 한 작은 작은 문으로 나가려고 했는데 그 작은 문 안에는 호랑이가 있었습니다.
- 8) 그래서.. 조심히 일어나려고 했는데.. 그만 물을 떨어뜨리고 말았습니다.
- 9) 그런데 **호랑이**는 일어나지 않았어요.
- 10) 그러자 문 밖에서 강아지가 있, 달려 왔습니다.
- 11) 아저씨는 조용히 하라고 말했어요.
- 12) 하지만 강아지는 아저씨 말을 듣지 못했습니다.
- 13) 아저씨는 부탁했지만 강아지는 듣지 않았어요.
- 14) 아저씨는 계속 조용히 하라고 했어요.
- 15) 그러자, 그, 어느 아줌마가 들어와서, 그, ... 제발 문 열어 달라고 했어요.
- 16) 그러자 아줌마는 기절하고 말았어요.
- 17) 그러자 그, 아저씨가, 그, 아줌마 일어나려고, 일어나라고 했어요.
- 18) 그러자 **호랑이**가 잠에서 깨어나 버렸어요.
- 19) 그러자 아저씨가 깜짝 놀라서 문이, 있는 곳으로 갔어요.
- 20) 그러자 **호랑이**가 벌떡 일어나 아저씨가 있는 곳으로 왔어요.
- 21) 하지만 **호랑이**는 다행이 그냥 갔어요.
- 22) 그래서 아저씨는 무사하다고 생각했어요.
- 23) 그래서, ... 그래서, ... 기분이 좋아졌죠.
- 24) 알고 보니까 **호랑이**는, 무서운 **호랑이**가 아니었어요. (+2s)
- 25) 그러자 그 깨어난 아줌마가 얼른 그 아저씨를 구하러 갔어요.
- 26) 그러곤 아줌마는 얼른 그 문을 열고 아저씨한테 나오라고 했는데 아저씨는 사자가 무섭지 않다고 했어요.
- 27) 그래서 아저씨가 그 사자한테 갔어요. (+2s)
- 28) 그러자 이번에는 사자가 너무 무섭게 했기 때문에 아저씨가 빨리 돌아, 도망 갔어요.
- 29) 아저씨는 멀리 날아가서, 아니, ... 위에 있었어요.
- 30) 아줌마가 빨리 내려오라고 했어요.
- 31) 그러자, 아저씨가 무섭지 않다고 말했어요.
- 32) 아줌마가 내려오라고 말했어요.
- 33) 그러자 그, **남자 아저씨**는 내려왔어요.

K3 (4m 1w 1d / 03:22)

- 1) **남자 아버지**가 어느 날 말에게 쫓기고 있었어요.
- 2) 그래서 **남자 아버지**는 어느 창고 속으로 들어갔죠.
- 3) 그런데 그 창고 속에 사자가 잠들고 있었어요.
- 4) 깜짝 놀란 **남자 아버지**는 빨리 나가려고 했죠.
- 5) 하지만 문을 열려다가 그만 문을 반대로 해서 잠גיע 하고 말았어요. (+3s)
- 6) 하지만 사자는 아직 일어나지 않았죠.
- 7) 그러던 **남자 아버지**는 도와달라고 요청을 청했어요.
- 8) 하지만 아무도 오지 않았죠.
- 9) 그래서 **남자, 아버지**는 사자에게 살금살금 다가갔어요.
- 10) 그러고는 작은 **문**에다가 나갈려고 했죠.
- 11) 하지만 그 작은 문에는 호랑이가 기다리고 있었어요.
- 12) **남자, 아버지**가 빨리 도망치려고 했는데 그만 실수로 물을 뿌리고 말았어요.
- 13) 하지만 사자는 아직 일어나지 않았죠.
- 14) 그러자 그때 강아지가 달려 왔어요.
- 15) 강아지가 마구 짖고 있었어요.
- 16) **남자 아이**는 사자가 일어날 것 같아서 조용히 하라고 했지만 강아지는 말을 듣지 않았어요.
- 17) 강아지는 계속 짖어 댔어요.
- 18) 그러자 **남자 아이**는 강아지를 발로 찼죠.
- 19) 하지만 강아지는 말을 듣지 않았어요.
- 20) 저기에따가 여자가 왔어요.
- 21) 그러곤 문을 열어달라고 **남자 사람**이 소리쳤죠.
- 22) 그 **여자 사람**은 기절을 하고 말았어요.
- 23) 강아지는 도망가고 말았죠.
- 24) **남자 아버지**는, 그 기절한 **아주머니**를 깨우려고 했어요.
- 25) 그때 그만 사자가 일어나고 말았어요.
- 26) **남자 아버지**는 깜짝 놀라서 도망가려고 했죠.
- 27) 그러자 사자가 일어났어요.
- 28) **남자 아버지**는 문을 열려고 했죠.
- 29) 그러곤 사자가 **남자 아버지** 곁으로 다가왔어요. (+2s)
- 30) 하지만 사자는 **남자 아버지**를 먹지 않았어요.
- 31) 그러곤 그냥 가만히 제자리에 앉았죠.
- 32) **남자 아버지**는 살았다고 생각했어요. (+2s)
- 33) 알고 보니까 사자는 별로 그렇게 무섭게 생기지 않았었어요. (+3s)
- 34) 그러자 **기절**에서 깨어난 **아주머니**가 얼른 **남자 아버지**를 구하려고 했어요.
- 35) 그래서 얼른, **아줌마**는 창고의 문을 열었죠.
- 36) 아줌마는 빨리 오라고 했어요.

- 37) 하지만 아버지씨는, 별로 사자가 무섭지 않다고 했죠.
- 38) 그러곤 사자의 곁으로 갔어요.
- 39) 사자 곁으로 가니까 사자가 물려고 해서 재빠르게 달려간 **남자 아버지**,... 를 쫓아간 아주머니는, ... **남자 아버지**가 너무 높은 곳에 **와** 있어서 깜짝 놀랐어요.
- 40) 그래서 아주머니는 빨리 내려오라고 했어요.
- 41) 하지만 **남자 아버지**는 전혀 무섭지 않다고 말했죠.
- 42) 아주머니는 빨리 오라고 했어요.
- 43) 그래서 **남자 아버지**는 멋지게 내려왔죠.
- 44) **Done!**

K4 (5m 5d / 03:24)

- 1) 남자 아저씨가 말에게 쫓겨났습니다.
- 2) 그래서 남자 아저씨는 어느 한 창고 속으로 들어갔습니다.
- 3) 그 창고 속에는 사자가 있어서 남자 아저씨는 깜짝 놀랐습니다.
- 4) 그래서 .. 살금살금 문으로 다가갔습니다.
- 5) 그러곤 .. 빨리 .. 나가려고 했습니다.
- 6) 그래서 .. 문을 열려고 했지만, 문이 닫혀져 버렸습니다. (+3s)
- 7) 그래서 .. 남자 아저씨는 .. 도움을 청했습니다. (+3s)
- 8) 그러곤, 남자 아저씨는 ... 그 살금살금 사자에게 다가갔습니다. (+2s)
- 9) 그러곤 뒤에 있던 작은 문으로 나가려고 했습니다.
- 10) 그런데 그 작은 문에는 호랑이가 있었습니다.
- 11) 그래서 남자 아저씨는 깜짝 놀랐습니다.
- 12) 문을 닫았습니다.
- 13) 그리고 남자 아저씨는 살금살금 .. 가려고 했습니다.
- 14) 그리고 그만 물을 떨어뜨리고 말았습니다.
- 15) 근데 사과가 일어나자, (laughing) 사자가 일어나지 않았습니다.
- 16) 그러자 그때, 개가 멍멍하고 울었습니다.
- 17) 남자 아저씨는 사과가, 사자가, 일, 일어날 것 같아서 조용히 하라고 했습니다.
- 18) 부탁 ... 했습니다.
- 19) 하지만, 그래도, 강아지는 말을 듣지 않았습니다.
- 20) 강아지가 뛰어들자 남자 아저씨는 강아지를 발로 찼습니다. (laughing)
- 21) 그런...자 어느 아주머니가 왔습니다.
- 22) 조용해 해 달라고 했습니다.
- 23) 그런데 그 아주머니는 기절하고 말았습니다.
- 23) 강아지는 도망갔습니다.
- 24) 그래서 남자 아저씨는 ... 깜짝 놀라서 아주머니를 ... 일어나게 하려고 했습니다.
- 25) 그런데 그만 사자가 일어나고 말았습니다. (+2s)
- 26) 그러자 그가 마추친, 남자 아저씨는 재빠르게 돌아갔, 다, 달려갔습니다. (+2s)
- 27) 그러자 사과가, 아저씨에게..., 다가갔습니다. (+3s)
- 28) 하지만 사자는 아저씨를 먹지 않았습니다. (+4s)
- 29) 그러자 아저씨는, 아직 자기가 살아있어서 다행이라고 생각했습니다. (+2s)
- 30) 그러자, 알고 보니 사자는, 별로 사납게 생기지 않았었습니다. (+2s)
- 31) 남자 사, 아저씨는 다행이라고 생각했습니다.
- 32) 그러자, 깨어난, 아주머니가, 빨리, 남자 아저씨를 구하려고 했습니다. (+4s)
- 33) 빨리 나오라고 했지만 남자 아저씨는 전혀 무섭다고 했, 습니다.
- 34) 그래서 남자 아저씨는 다시 한번, 사과의 곁으로 가 봤습니다.
- 35) 그리고 남자 아저씨가, 사과를 하자, (laughing) 사자가 으앙하고 울어서 남자 아저씨가 빠르게 달아갔습니다.

- 36) 그리고 **빨르게** 달아가서 높은 곳까지 가 있었습니다. (+2s)
- 37) **남자**, **아저씨가**, 아주머니에게 손을 흔들었습니다.
- 38) 뭐라고? **남자 아저씨**는 전혀 무섭지 않다고 했습 ... 니다. (+2s)
- 39) 아주머니는 빨리 내려오라고 했습니다.
- 40) 그러자 남자는 .. **날고** 있는 것처럼 내려왔습니다.

K5 (6m 5d / 03:20)

- 1) 어느 아저씨가 말에 쫓겨서 얼른 창고 속으로 들어갔습니다.
- 2) 그런데 그 창고 속에는 사자가 자고 있었습니다.
- 3) 그래서 **남..자 아저씨**는 살금살금 문 쪽으로 갔습니다. (+2s)
- 4) 그리고 문을 열어볼려고 했지만 문은 **닫..히고** 말았습니다. (+2s)
- 5) 그래서 **남자 아저씨**는 누군가 도와달라고 도움을 요청했습니다. (+3s)
- 6) 그러..자 **남자 아저씨**는 살금살금 다가갔습니다.
- 7) 그러곤 뒤에 있는 작은 문으로 나가려고 했습니다.
- 8) 그런데 거기엔 호랑이가 있었습니다.
- 9) 그래서 **남자 아저씨**는 얼른 문을 **닫..았**습니다.
- 10) 그리고 **살금..살금** 일어났습니다.
- 11) 그러자 그 문 옆에 있던 물이 쏟아지고 말았습니다.
- 12) 하지만 사자는 일어나지 않아서 다행이라고 생각했습니다.
- 13) 그러자 옆에서 **강아지가 날라와서** 멍멍하고 울었습니다.
- 14) 이제는, 사자가 일어날 것 같아서 조용히 해 달라고 부탁했습니다.
- 15) 하지만, 강아지는, 말을 듣지 않고 계속 **멍멍거**했습니다.
- 16) 그래서 아저씨는 강아지를 발로 **찔**습니다. (+3s)
- 17) 그러자 아주머니가 **도와달라고 왔**습니다.
- 18) **하,..** 문을 열어달라고 했지만 아주머니는 기절하고 말았습니다. (+2s)
- 19) 그래서 **남자 아저씨..**는, **떨어진 물이 있었던 바구..니에 있었던 물을**, 아주머니에게 뿌려서 **기절한 걸 일어나게 하려고** 했습니다.
- 20) 그런데 **호랑이**가 일어나 버리고 말았습니다.
- 21) 그래서 **남자 아저씨**는 얼른 문쪽으로 다가갔습니다.
- 22) 그러자 **호랑이**가 **남자 아저씨** 곁으로 왔습니다.
- 23) 하지만 **호랑이**는 아무렇지도 **않**,은 듯이 다시 자리로 돌아갔습니다. (+3s)
- 24) 그러자 **남자 아저씨**는 아직 자기가 **살고 있다는 지** 알았습니다. (+2s)
- 25) 알고 보니 사자는, 별로 그렇게 무서워 보이지 않았습니다. (+3s)
- 26) 그러자, 기절해서, **기절하고 있던** 아주머니가 **깨어나서 ... 습**니다.
- 27) 그러곤 얼른 창고에 있는 문을 **열어줘서** 빨리 오라고 했습니다.
- 28) 그러자 아저씨는 사자가 전혀 무섭지 **않**다고 했습니다. (+2s)
- 29) 그러곤, 사자 곁으로 한번 더 **가** 봤습니다.
- 30) 그러자 사자가 먹으려고 해서, 아저씨는 빠르게 도망쳐 나가서, **높은 곳으로 있었**습니다. (+3s)
- 31) 아저씨가 손을 흔들었습니다. (+3s)
- 32) 아, 아저씨가, 그 높은 곳에서 **멋진 걸 보**었습니다.
- 33) 그러자 아주머니가 빨리 내려오라고 했습니다.
- 34) 그러자 아저씨가 나는 것처럼 내려왔습니다.

K6 (7m 6d / 03:24)

- 1) 아.. 어떤 아저씨가 말에게 쫓아가서 어느 창고 속으로 들어갔습니다.
- 2) 근데 그 창고 속에 사자가 자..고 있었습니다.
- 3) 그래서 남자 아저씨는 사자가 일어나지 않게 조용히 걸었습니다.
- 4) 그리고 남자 아저씨는 문을 열려고 했습니다.
- 5) 하지만 문이 닫히고 말았습니다.
- 6) 하지만 사자는 일어나지 않았습니다.
- 7) 그래서 남자 사람이 누군가 도와달라고 했습니다. (+3s)
- 8) 그리고 남자 아저씨는 살금살금 걸었습니다.
- 9) 그러곤 남자 아저씨는 뒤에 있는 문으로 나가려고 했습니다.
- 10) 그런데 그 뒤에는 호랑이가 있었습니다.
- 11) 그래서 남자 아저씨는 열린 문을 닫았습니다.
- 12) 그리고, 일어나려고 하는데 그만 문을, 물을 쏟고 말았습니다.
- 13) 하지만 사자는 일어나지 않았습니다. (coughing)
- 14) 그러자 강아지가 와서 멍.. 짹짹, 짹 시작했습니다.
- 15) 이제는 사자가 일어날 것 같아서 조용히 하라고 했습니다.
- 16) 하지만 강아지는 말을 듣지 않았습니다.
- 17) 강아지는 계속 짹고 있었습니다.
- 18) 그래서 아저씨는 강아지를 발로 찼습니다.
- 19) 그러자 아주머니가 도와주러 왔습니다.
- 20) 아저씨는 문을 열어달라고 했습니다.
- 21) 그러자 아주머니는 기절하고 말았습니다.
- 22) 강아지가 도망갔습니다.
- 23) 그래서, 아저씨는 빨리, 물, 떨어진 물로 아줌마를 깨울려고 했습니다.
- 24) 그러자 그때 호랑이가, 사자가 일어나 버렸습니다.
- 25) 그러자 아저씨는 열린, 등에 있는 쪽으로 달려갔습니다.
- 26) 그러자 사자가 일어나고 아저씨 쪽으로 갔습니다.
- 27) 하지만 그러고 아무 일도 없는 것처럼 다시 제자리로 돌아갔습니다.
- 28) 그리고 남자 아저씨는 자기가 살아 있다는 걸 알았습니다.
- 29) 그리고 사과, 사자가 그렇게 무서워 보이지 않았습니다. (+3s)
- 30) 그러자 기절하고 있던 아주..머니가 일어나서 빨리 아저씨..가 있는 창고에 갔습니다.
- 31) 그러곤 창고 문을 열어서 빨리 나오라고 했습니다.
- 32) 하지만 아저씨는 사자가 전혀 무섭지 않다고 했습니다.
- 33) 그래서 아저씨는 사자가 있는 쪽으로 가 봤습니다.
- 34) 사자 가까이 가자 사자가 아저씨를 먹을려고 해서 아저씨는 빠르게 달려갔습니다.
- 35) 그리고 가자, 아저씨는 아주 높은 곳에 올라가 있었습니다.
- 36) 아줌마는 아저씨가 있는 곳까지 갔습니다.
- 37) 그러자 아저씨가 높은 곳에서 평장한 걸 보였습니다.
- 38) 그러자 아줌마가 빨리 내려오라고 했습니다.
- 39) 그래서 아저씨는 나는 것처럼 내려 왔습니다.

K7 (8m 5d / 03:22)

- 1) 아 ... 아저씨가 말에게 **쫓아갔습니다**.
- 2) 그래서 아저씨는 창고 속에 들어갔습니다.
- 3) 그러자 그 창고 속에는 사자가 ... 자고 있었습니다.
- 4) 그러자 ... 아저씨가 ... 소리 내지 않고 걸어갔습니다.
- 5) 그러고는 문 쪽으로 왔습니다.
- 6) 그리고 손을 뻗어서 문을 열어보려고 했지만 **문은 닫혀지고 말았습니다**.
- 7) 사자는 여전히 자고 있었습니다.
- 8) 그러자 **남자 아저씨가**, 도와 달라고, 부탁했습니다. (+3s)
- 9) 그러자 **남자 아저씨가** 또 다시 소리나지 않게 걷기 시작했습니다.
- 10) 그러곤 뒤에 있는 문으로 나가려고 했습니다.
- 11) 뒤에 있는 문으로 들어가자 거기에 호랑이가 있었습니다.
- 12) 아저씨는 빨리 문을 닫았습니다.
- 13) **사과**는 아직 자고 있었습니다.
- 14) 아저씨는 살금살금 일어나다가 그만 물을 쏟고 말았습니다.
- 15) 하지만 사자는 일어나지 않았습니다.
- 16) 아저씨는 다행이라고 생각했습니다.
- 17) 그러자 **강아지가** 짖으면서 왔습니다.
- 18) 그러자 아저씨는 이대로 가다간 **사자가 일어나버릴 줄 알고** 생각해서 조용하라고 했습니다.
- 19) 하지만 강아지는 계속 짖었습니다.
- 20) 아저씨는 부탁했습니다.
- 21) 하지만 강아지는 계속 짖고 있었습니다.
- 22) 그러자 아저씨가, 강아지를 발로 차기 시작했습니다. (laughing)
- 23) 그러자 아주머니가 왔습니다.
- 24) 아저씨가 문을 열어달라고 하자 아줌마는 기절했습니다.
- 25) 강아지는 도망갔습니다.
- 26) 아저씨는, 일어나서 **떨어진 물들을 든 상자에서 물을 아저씨에게** 흘려 보냈습니다. **어여, 아주마이!** (laughing)
- 27) 그러자 사자가 일어나 버리고 말았습니다.
- 28) 아저씨는 빨리 달려가, 문이 열린 쪽으로 갔습니다.
- 29) 문을 열려고 했지만 문은 움직이지 않았고 사자는 갑자기 벌떡 일어났습니다.
- 30) 그러자 아저씨는 얼어버렸습니다.
- 31) 사자는, 하지만 아무렇지도 않은 듯이 다시 제자리로 돌아갔습니다. (+2s)
- 32) 아저씨는 자기 몸을 만져봤습니다.
- 33) 살아있었습니다.
- 34) 다행이라고 생각했습니다.
- 35) 그러자 사자가 **무섭게 보이지 않기** 시작했습니다.

- 36) 아저씨는, 후~라고 가슴을 찢습니다.
- 37) 그러자 아주머니가 일어났습니다. (laughing)
- 38) 아주머니는 아저씨가 살아있는 걸 봤습니다.
- 39) 그러곤 빨리 창고의 문을 열었습니다.
- 40) 아줌마는 빨리 나오라고 했습니다.
- 41) 하지만 아저씨는 아무렇지도 **않다지** 말했습니다.
- 42) 그러자 아저씨가 사자.. 곁으로 간다고 했습니다.
- 43) 그러자, 아저씨는, **사자의 가까이로 가서 사자가 갑자기 아줌마, 아니 아, 아저씨를 먹으려고**
해서 아저씨는 빨리 ???했습니다.
- 44) 아줌마도 아저씨를 찾아갔습니다.
- 45) 그러곤 아저씨를 찾았습니다.
- 46) 아저씨는 높은 곳에 올라가 있었습니다.
- 47) 아줌마가 내려오라고 했습니다. (+3s)
- 48) 아저씨는, 높은 곳에서 **굉장한 걸** 했습니다. (+2s)
- 49) 아주머니는 빨리 내려오라고 했습니다.
- 50) 그래서 아저씨는 나는 듯이 내려왔습니다.

K8 (10m 1w / 03:20)

- 1) **남자 아저씨가 말에 쫓겨났습니다.**
- 2) **남자 아저씨는 어느에** 방 속으로 들어갑니다.
- 3) 그 방에는 사자가 자고 있습니다.
- 4) 아저씨는 사자 ... 한테 들키지 않게, 소리내지 않고, 문 쪽까지 갔습니다. (+8s)
- 5) 문이 닫히고 말았습니다. (+2s)
- 6) 그래서 **남자 아저씨는**, 도와달라고 했습니다. (+3s)
- 7) 그런데 **남자 아저씨는**, 다시 걸어가서 ... 방에 뒤에 있는 문을 열고 나가려고 했습니다.
- 8) 그러자 거기에는 호랑이가 있었습니다.
- 9) 아저씨는 빨리, 문을 닫았습니다.
- 10) 그리고 아저씨는 또 다시 살금살금 일어났습니다.
- 11) 그러자, 물을 떨어뜨리고 말았습니다.
- 12) 사자는 아직 자고 있었습니다. (+3s)
- 13) 그러자 거기, **멍멍이**가 달려왔습니다.
- 14) **멍멍이가 멍멍이라고 외치고 있었습니다.**
- 15) 사자가 일어날 것 같았습니다.
- 16) **남자 아이는, 아저씨는**, 강아지에게 조용히 하라고 했습니다.
- 17) 하지만 강아지는 말을 듣지 않았습니다.
- 18) 강아지는 계속 쫓아왔습니다.
- 19) 아저씨가 강아지를 발로 찼습니다. (+3s)
- 20) 그러자 아줌마가 왔습니다.
- 21) 아저씨가 ... 문을 열어달라고 했습니다.
- 22) 그러자 아줌마는 기절했습니다.
- 23) 강아지는 도망갔습니다.
- 24) 아저씨는, **물을 아줌마를 일어나려고 하였습니다.**
- 25) 그러자, 사자가 일어나버렸습니다. (+2s)
- 26) **남자 아저씨는** 그걸 눈치채고 빨리 문이 있는 쪽으로 도망갔습니다.
- 27) 사자는 일어났습니다.
- 28) 그러곤 **남자 아저씨가** 있는 쪽으로 갔습니다.
- 29) 하지만 그러곤 사자는 다시 제자리로 돌아왔습니다.
- 30) 그러곤 누웠습니다. (+3s)
- 31) 아저씨는, 자기 몸을 만졌습니다.
- 32) 살아있었습니다. (+2s)
- 33) 그러자 아저씨가 사자를 보자, 사자가 무섭게 보이지 않았습니다.
- 34) 아저씨는 한숨을 쉰습니다.
- 35) 그러자 **기절하고 있었던** 아주머니가 ... 일어났습니다.
- 36) 그러곤, 빨리, 문을 열려고 갔습니다.

- 37) 문을 열었습니다.
- 38) 열었습니다.
- 39) 아주머니가 빨리 오라고 했습니다.
- 40) 아저씨는 무섭지 않다고 했습니다. (+2s)
- 41) 아저씨는 아줌마한테 기다리라고 했습니다.
- 42) 그러고는 사자 곁으로 갔습니다.
- 43) 그러자 사자가 아저씨를 먹으려 했습니다.
- 44) 그러자 아저씨가 **부르부르부르하고** 달려갔습니다.
- 45) 아주머니는 아저씨를 따라갔습니다.
- 46) 이쪽으로 **가다가 말까나** 하다가 아저씨가 있는 곳으로 갔습니다.
- 47) 아저씨는 높은 **곳으로** 올라가 있었습니다. (+2s)
- 48) 아주머니가 뭐 하냐고 물었습니다.
- 49) 아저씨는, 위에서 **굉장한 걸 보였습니다**. (+3s)
- 50) 아줌마는 내려오라고 했습니다.
- 51) 아저씨는 나는 듯이 내려왔습니다.

K9 (11m 1d / 03:15)

- 1) 아저씨가 **말에게** 쫓아갑니다.
- 2) 그래서 아저씨가 어느 방에 들어갑니다.
- 3) 그 방에는 사자가 있습니다.
- 4) 사자는 자고 있었습니다.
- 5) 아저씨가 ... 문을 열려고 ... 했습니다. (+2s)
- 6) 하지만 문은 닫히고 말았습니다. (+5s)
- 7) 그래서 아저씨는 도움을 요청했습니다. (+2s)
- 8) 그리고 아저씨는 걷기 시작했습니다. (+2s)
- 9) 그리고는 뒤에 있는 문으로 나가려고 했습니다.
- 10) 하지만 거기에는 호랑이가 있었습니다.
- 11) 아저씨는 빨리 문을 닫았습니다.
- 12) 그리고 아저씨는 살금살금 ... 일어나자 문을, 물을 쏟아붓고 말았습니다.
- 13) 사자는 자고 있었습니다. (+2s)
- 14) 그러자 개가 와서 짖기 시작했습니다.
- 15) 아저씨가 ... 이대로는 ... 사자가 일어날 것 같다고 생각했습니다.
- 16) 조용히 하라고 했습니다.
- 17) 하지만 강아지는 말을 듣지 않았습니다.
- 18) 그래서 아저씨가 강아지를 찼습니다.
- 19) 그러자 아주머니가 왔습니다.
- 20) 그러자 아저씨는 문을 열어달라고 했습니다.
- 21) 아주머니는 기절했습니다.
- 22) 강아지는 도망쳤습니다. (+2s)
- 23) 그래서 **아주머니**는 물로 **호주머니**를 깨우려고 했습니다.
- 24) 사자가 일어나 버렸습니다. (+2s)
- 25) 그래서 아저씨는 얼른 빠르게 도망쳤습니다.
- 26) 사자가 일어나서 아저씨 쪽으로 갔습니다.
- 27) 하지만 사자는 아무것도 하지 않았습니다.
- 28) 그리고 다시 제자리로 돌아왔습니다. (+2s)
- 29) 아저씨는 자기 몸을 만졌습니다.
- 30) 살아있었습니다.
- 31) 다행이라고 생각했습니다. (+3s)
- 32) 사자가 무섭게 보이지 않았습니다.
- 33) 아저씨가 한숨을 쉬었습니다.
- 34) 아주머니는...일어났습니다.
- 35) 아저씨가 살아있는 걸 보았습니다.
- 36) 그리고 아주머니는 빨리 문을 열었습니다.

- 37) 빨리 오라고 했습니다.
- 38) 하지만 아저씨는 사자가 무섭지 않다고 했습니다.
- 39) 그래서 아저씨는… 아주머니에게 기다리라고 하고 사자 쪽으로 갔습니다.
- 40) 그러자 사자가 아저씨를 먹으려고 했습니다.
- 41) 그래서 아저씨는 **아주 아주 아주** 빠르게 달아났습니다.
- 42) 아주머니는 그 아저씨를 따라갔습니다.
- 43) 아저씨는 오라고 했습니다.
- 44) 아주머니는 뭐 하나고 물었습니다.
- 45) 아저씨는 거기에서 **굉장한 걸 보였습니다**.
- 46) 아주머니는 내려오라고 했습니다.
- 47) 아저씨는 나는 것 같이 내려왔습니다.

K10 (12m 1w / 03:23)

- 1) 아저씨가 말한데 쫓아 들어갑니다.
- 2) 아저씨가 어느 속으로 들어가자 사자가 잠자고 있었습니다.
- 3) 아저씨는 ... 걸어서 ... 문이 있는 쪽까지 갔습니다.
- 4) 문을 열려구, 손을 ... 뻗었는데 닫혔습니다. (+3s)
- 5) 아저씨는 ... 도움을 요청했습니다. (+3s)
- 6) 그러자 아저씨는 다시 ... 걸어서 ... 뒤에 있는 문으로 나가려고 했습니다.
- 7) 그러자 거기선 호랑이가 있었습니다.
- 8) 아저씨는 빨리 문을 닫았습니다.
- 9) 호랑이 꼬리가 움직였습니다.
- 10) 아아, 아저씨는 깜짝 놀랐습니다.
- 11) 그래서 물을 떨어뜨렸습니다.
- 12) 호랑이는 자고 있습니다.
- 13) 그러자 강아지가 왔습니다.
- 14) 강아지가...시끄럽게 굴었습니다.
- 15) 사자가 일어날 것 같았습니다.
- 16) 아저씨는 강아지한테 조용히 하라고 했습니다.
- 17) 강아지는 말을 듣지 않았습니다. (+2s)
- 18) 강아지는 계속해서 날, 울었습니다.
- 19) 아저씨는 강아지를 발로 찼습니다.
- 20) 그러자 아주머니가 왔습니다.
- 21) 아저씨가 문을 열어달라고 했습니다.
- 22) 아줌마는 기절했습니다.
- 23) 강아지는 ... 도망갔습니다.
- 24) 아저씨는, 떨어진 물로 아주머니를 깨우려고 했습니다.
- 25) 그러자 사자가 일어났습니다.
- 26) 큰 하품을 하면서 일어났습니다.
- 27) 아저씨는 빨리 도망쳤습니다.
- 28) 사자가 일어났습니다.
- 29) 아저씨가 문을 열라고 했습니다.
- 30) 사자는 일어나서 아저씨가 있는 곳으로 갔습니다. (+2s)
- 31) 그치만 사자는 아무것도 하지 않았습니다.
- 32) 사자는 그냥, 다시 제자리로 돌아왔습니다.
- 33) 아저씨는 자기 몸을 만졌습니다. (+2s)
- 34) 살아있었습니다.
- 35) 사자는 ... 무섭게 보이지 않았습니다. (+2s)
- 36) 아저씨는 ... 다행이라고 생각했습니다.

- 37) 아주머니는 기절에서 일어났습니다.
- 38) 아줌마는 살아있는 아저씨를 봤습니다.
- 39) 아줌마는 문을 열었습니다.
- 40) 빨리 나오라고 했습니다.
- 41) 아저씨는, 무섭지 않다고 했어요. (+2s)
- 42) 아저씨는 사자가 있는 쪽으로 가 보겠다고 했습니다.
- 43) 사자한테 가까이 가자 사자가 아저씨를 먹려고 했습니다.
- 44) 그래서 아저씨는 완전 완전 완전 빠르게, 도망쳤습니다.
- 45) 아주머니는 그를 따라갔었습니다.
- 46) 아저씨는 아주 아주 아주 높은 곳에 있었습니다. (+2s)
- 47) 아주머니는 아저씨가 있는 곳으로 왔습니다.
- 48) 뭐 하냐고 물었습니다.
- 49) 아저씨는 위에서 굉장한 걸 보였습니다. (+3s)
- 50) 내려오라고 했습니다.
- 51) 아저씨는 나는 것 같이 내려왔습니다.